

北米・ハワイ漂流奇談(その1)

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林

(巻 / Volume)

60

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

192

(終了ページ / End Page)

114

(発行年 / Year)

2013-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021161>

北米・ハワイ漂流奇談

（その一）

宮 永 孝

- はじめに
- 一 奥州・若宮丸
 - 二 安芸国あきのくに（現・広島県）・稲若丸
 - 三 尾張・宝順丸
 - 四 尾張・督乗丸とくじょうまる
 - 五 備前児島こじま（現・岡山県南東部）の漁夫クエモン、ヒロ（ハワイ島東部）に上陸
 - 六 日本漁船（船名未詳）のオアフ島漂着
 - 七 越後国（現・新潟県）の船（船名未詳）オアフ島に漂着
 - 八 越中えっちゅう（現・富山県）・長者丸
 - 九 土佐・漁船（船名なし）の漂流
 - 十 摂津（現・大阪の北部と兵庫県東部）・栄寿丸（永世）
 - 十一 アメリカの捕鯨船、太平洋上で和船（船名未詳）を発見
 - 十二 紀州・天寿丸てんじゅうまる

はじめに

風波に身をまかせて、海上をただようことを「漂流」という。が、それは生から死にむかっている海難者の不可抗力の闘いでもあった。こんにちなおも世界中で海難事故がひん発しており、それによって命をおとす人は多い。

本稿は、主として江戸時代に太平洋上で強風と大波とにより難破し、北米やハワイ群島に流れついたり、あるいは太平洋上で外国船に救助され、ハワイ群島の一つ「オアフ島」に連れて来られた日本漂民くわくの奇しき運命とその後の生活について綴ったものである。が、無事本国に帰還できたものはごくわずかであり、大半は海底のもくずと消えた。

帰国組は、いったん牢に入れられたのち、取調べがおこなわれ公式調書をとられる。いわゆる「口書」(「口上書」ともいう)がそれだが、その口書にもとずいて、奉行書のお白洲で、役人によって吟味がおこなわれる。

吟味はまず、漂流の身元の確認にはじまり、漂流から帰国するまでのいきさつについて聞かれる。とくに役所がもっとも懸念したのは、――

- 一 キリスト教の道に入らなかったか。また人から信仰を勧められなかったか。
- 一 武器などを持ち帰らなかったか。
- 一 外国において商売をやらなかったか。

といった点であった。

漂流民らは外国において教会を見学しているばあいが多く、中には入信し、洗礼をうけた者もいる。が、かれらはそれらの事実をひたすら隠そうとした。

漂流の外国における実体験を、書物にまとめたものが『漂流記(譚)』であるが、それはかならずしも船乗りのことばを直接伝えたものではなく、書き手や編集者のことばが挿入されているばあいが多い。そのためじゅうぶん注意してよむ必要があることはいうまでもない。

海上を人や荷などを載せてはこぶものを船という。が、江戸時代の大きな荷船を俗に『千石船』とか『弁才(財)船』とよんだ。

そういった和船の構造の概要をつぎにのべてみよう。千石船(弁才船)は、もともと波おだやかな瀬戸内海を中心に発達した沿岸航海用の荷船だという。この船の基本構造は、

「航(敷・丁ともいう)」

と呼ばれる厚い船底板を根幹としている。

これに幅のひろい外板を組みあわせ、内側からたくさんせんりょうの船梁(西洋型船でいう『竜骨』)を入れて横強度をもたせたものである。

船の動力は、風である。取はずし式の帆柱につけた帆(四角形の麻布)が、風をうけて船を進ませる。

舵かじも引きあげ式なのを特徴としている。それは船体の割合からすれば、ひじょうに大きなもので櫂(材はかたく、弾力がある。船舶用)ででき

ている。舵柄だへいの下側に、

「羽板はねいた」（舵面）

と呼ばれるものが付いていて、その面積は約三坪（たたみ六畳に匹敵）もある。

こういった巨大な舵をそなえていても、いったん大時化おほときけに遭うと破損し、それが漂流の原因となった。

荷は船倉のほか、「胴の間上」にも多量につみ上げたから、船体の大きさのわりには積載能力が高かった。甲板は水を漏らさないように出来ていないから、波をかぶると船内に水が入った。時化のときは、船の安全を確保するために、

荷打ちにうち（積荷を海中に投棄する）

帆柱の切断

などをおこなない、さらに髪を切って、それを船内の神棚にそなえ、神仏の加護を祈願した（石井謙二「註記 漂流船覚え書」『日本庶民生活史料集成 第五卷 漂流』所収、三一書房）。

航海の方法。

千石船は、岸沿いや島づたいを航海した。陸上のつぎのようなものを目標として走航した。これを「地乗り」とか「沖乗り」という（小林茂文「漂流と日本人」）。

山の頂 <small>いただき</small> や岩	大きな樹木	建物
島敷 <small>とうじく</small>	岬 <small>みさき</small>	断崖
神社の鳥居	灯ろう	常夜灯 <small>じょうやとう</small> （一晩中ともしておく灯火）

装備としては、――

磁石じしよく（和磁石——十二支の十二方位をしるしたもので、夜間や雲霧ちゆの航海で用いる）

測天儀（太陽や星の高度を計るもの）

測量器（陸からの距離を計るもの）

日時計 望遠鏡

などを用意し、先人が作成した航路図や写図をもつことがあっても、とくに海図をもたなかった。

江戸時代にはじつに海難が多かった。そのじっさいの件数をしるした史料はないが、年に数百隻から千隻以上もあったのではないかと推定されている。

幕府や諸藩は、米や物産（正月用品）を江戸に回送し、金を調達した。船の運行が盛んなのは、米の収穫や年貢米の取りたてがおわる——十一月から十二月（太陽暦の十二月、一月）

である。が、この時期は気候がわるく、いちばん海難が多かった（須藤利一編著『船』法政大学出版社、昭和四十三年七月）。

要するに“大西風”と呼ばれる——真冬の北西季節風（日本海や北太平洋の中緯度地帯に吹く）が、漂流を発生させるいちばんの元凶であった。運よく外国に漂着するまで、たいてい半年以上かかっており、ときに一年以上もかかることも珍しくなかった。漂流の発生ともうひとつ密接な関係があるのは海流である。

“黒潮くろしほ”は、日本近海を流れる最大の海流であり、暖流の一つである。フィリピンや台湾の東方に源を發し、その幅は一五〇キロから三〇〇キロほどで、厚さは数百メートルである。流速は、時速二キロから四、五キロである。色は濃い“紫色”であるので、

「桔梗水ききょうみづ」

「黒瀬川」

と呼ばれることがある。

千石船は、いったんこの“大西風”によって吹き流され、かつ“黒潮”に乗ったらさいご、広い太平洋にむかうことを意味し、それは絶望的な

漂流のはじまりでもある。

しかし、幕末になり、太平洋を漁場とする外国の捕鯨船や中国へむかう商船の往来がひんばんになるにつれて、それらの船に救助される難波船が多くなった（倉嶋厚「気象学からみた漂流記」）。外国船と出会うことは僥倖ごうこうであり、万にひとつの可能性しかないものであった。

漂流民が将来したもの。

幸運にも帰国できた漂流民は、なによりもみずから見聞した異国での生の体験なまをもたらしした。それは外国の風土や風俗（衣、食、住いや行事）にはじまり、国家形態や政事、技術、言語など——海外知識ぜんばんに及ぶものであった。が、為政者が帰還者の知識を積極的に活用するのは、嘉永六年（一八五三）のペリー来航後のことという（小林茂文「漂流と日本人」）。当時、為政者がいちばん欲したのは、西洋型帆船の建造術や航海術といった、人間生活に役にたつじっさい的な技術であって、外国事情そのものではなかった。アメリカから帰還した万次郎（ジョン万）や彦蔵（ジョゼフ・ヒコ）のばあい、異国における生活様式のほか——

政治形態（大統領制度）

議会（民主）政治

訴訟制度

海上保険制度

交通・通信制度（蒸気船、汽車、電信）

などの情報を伝えている。

幕府は世界の主要各国のうごきや事件を、出島のオランダ人が提供してくれる風説書ふうせつがきによって知っていたから、異国の暮らしぶりなどに大きな関心をしめさなかった。

水夫かこのほとんどはじゅうぶん読み書きができなかった上に、外国語の素養がなかったから、異国を正しく認識したり、理解することはできなかったはずである。しかし、万次郎や彦蔵は現地において学校教育をうけていたから、当時の日本人としては卓絶した英語力や理解力もっていた。万次郎はじぶんが将来した航海術の翻訳を命じられ、『亜美理加合衆国航海学書（アメリカ）』（安政四年「一八五七」六月）を完成したし、その語学力と航海術を買われて咸臨丸に乗り組み、ふたたび渡米した。

彦蔵も語学力を買われ、帰国後、米国領事館の通訳となって活躍するが、辞任したのちわが国最初の新聞『海外新聞』を発刊したり、大蔵省會計局に出任したり、製茶の輸出商となったり、蒸気による新式精米所をはじめたりし、実業家の道をあゆんだのも海外で培った知識に刺激されたことであろう。が、商才がなかったものか、ことごとく商売に失敗した。しかし、ジョゼフ・ヒコは、わが国の新聞文化の礎をきずいた人として、その名は不朽のものとなった。

本稿で取りあげるのは、つぎのような遭難船のばあいである。

一 奥州・若宮丸

(寛政五年「二七九三」十二月、仙台沖で漂流し、文化元年「一八〇四」十六名ちゅう四名帰国)

アリューション列島中の孤島に漂着。ロシアリアメリカ会社の総支配人に親切にされる。オホーツク、ヤクーツク、イルクーツク、モスクワを経てペテルスブルクへ送られ、ロシアで八年間くらす。アレクサンドル一世に拜謁する。露艦で軍港クロンシュタットを出帆。イギリス、ブラジル、ホルン岬を経て太平洋に出、ハワイ諸島（オアフ島？）に寄港。カムチャッカに寄り、ロシア使節レザノフとともに四名が長崎に到着。日本人初の世界一周。

二 安芸国（現・広島県）・稲若丸

(文化三年「二八〇六」一月、下田沖で漂流し、文化四年「二八〇七」六月、八名ちゅう三名帰国)

アメリカ商船に救助され、オアフ島のホノルルに上陸し、四ヵ月ほどくらす。のちマカオ、広州、パタビアを経て長崎に到着。

三 尾張・宝順丸

（天保三年「一八三二」十一月、鳥羽沖で漂流し、約一年後ワシントン州オリンピック半島のアラバ岬付近に漂着。乗組員十四名のうち、漂流ちゅうに十一名が死亡し、三名だけが生き残ったが、帰国しなかった）

四 尾張・督乗丸^{とくじょうまる}

（文化十年「一八二二」十月、遠州灘で漂流し、文化十三年「一七二六」九月、十四名ちゅう二名帰国）

漂流して四十八日後、カリフォルニアの沖でアメリカ商船によって救助される。生存者三名は、ノバ・イスパニア（現・カリフォルニア）の村に上陸。のちアラスカ、カムチャッカを経て、薩摩・尾張の漂流民六名と合流し（生存者三名のうち一名は死亡）、ロシア船でエトロフ島のはずれに上陸。

五 備前児島^{こじま}（現・岡山県南東部）の漁夫クエモン、ヒロ（ハワイ島東部）に上陸。

六 日本漁船（船名未詳）のオアフ島漂着。

（天保三年「一八三二」十一月、オアフ島のワイアレアちかくに漂着し、ホノルルに廻船ちゅう、バーバース岬で難破。生存者四名）

七 越後国（現・新潟県）の船（船名未詳）オアフ島に漂着。

（天保五年「一八三四」某月、生存者七名、のちカムチャッカ経由で日本に送還される）

八 越中（現・富山県）・長者丸

〔天保九年「一八三八」十一月、金華山沖で漂流し、天保十四年「一八四三」五月、四名が帰国した「うち一名、江戸で病死」〕

ミッドウェイ諸島付近でアメリカの捕鯨船に救助され、のち生存者六名は、同国の捕鯨船に分乗させられる。マウイ島、ハワイ島、オアフ島に上陸。漂流民・平四郎、オアフ島で病死。のち生存者五名は、イギリス船でカムチャッカにむかい、オホーツク、シトカ（アラスカ）を経て、ロシア船でエトロフ島に上陸。

九 土佐・漁船（船名なし）の漂流

〔天保十二年「一八四二」一月、足摺岬あしずりの沖で漂流し、嘉永四年「一八五二」一月、五名ちゅう三名帰国〕

鳥島とりしま（現・南鳥島）に漂着し、約半年後にアメリカの捕鯨船に救助される。生存者五名はオアフ島のホノルルに上陸。うち一名——万次郎（のちのジョン万）は、船長ホイットフィールドとともにアメリカにむかう。漂流民・重助は、クーラウ（オアフ島）で病死。のち万次郎ら三名は、嘉永四年（一八五二）十一月琉球に上陸し、のち帰国。

十 摂津（現・大阪の北部と兵庫県東部）・栄寿丸（永世）

〔天保十二年「一八四二」十月、犬吠埼の沖で漂流し、弘化二年「一八四五」十二月、十三名ちゅう四名帰国〕

太平洋上でスペインの密貿易船に救助され、十三名ちゅう七名は、メキシコ領カリフォルニア南部のサン・ルカス岬に捨てられる。その後、七名はサン・ホセでくらす。初太郎と善助はマサトラン（港町）をへてマカオにむかう。途中、オアフ島のホノルルに寄港。このとき土佐の漂流民四名と会う。初太郎のみマカオで下船し、アメリカの宣教師サミュエル・ウェルズの世話になる。のち乍浦ツァンプにおもむき善助と会う。乍浦より他の日本漂流民らといっしょに帰国の船に分乗する。サン・ルカス岬で捨てられなかった漂流民らは、船が座礁したとき逃亡する。が、その後の消息は不明。

十一 アメリカの捕鯨船、太平洋上で和船（船名未詳）を発見

（弘化四年「二八四七」三月～四月、北緯四二度、東経二五〇度の地点で、日本の難波船を発見。生存者は四名。ホノルルに上陸したも
のか）

十二 紀州・天寿丸てんじゅまる

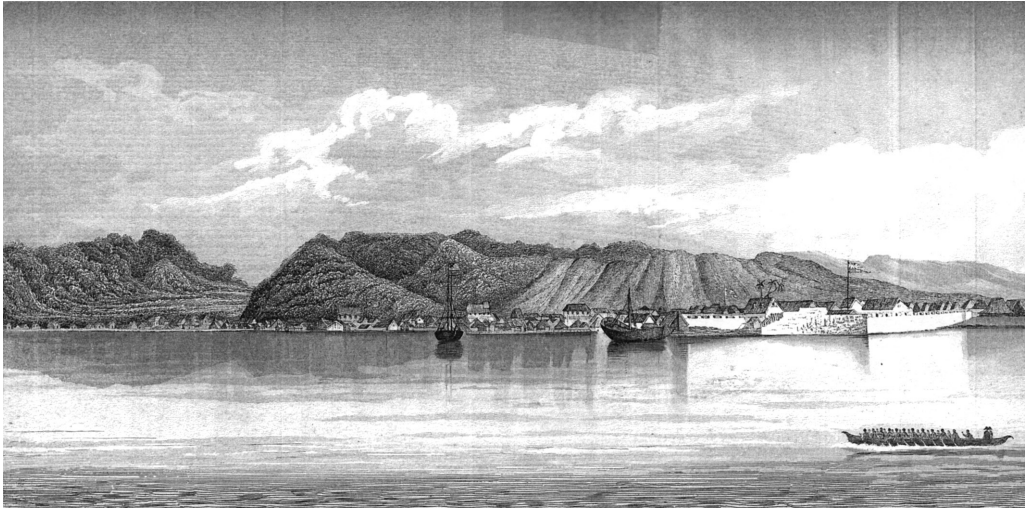
（嘉永三年「二八五二」一月、伊豆沖で漂流し、嘉永五年「二八五四」十二月、十三名ちゅう五名帰国）

厳冬の北太平洋上でアメリカの捕鯨船「ヘンリー・ニールランド」号に救助される。漂流六名はロシアの官憲にひきわたされる。四名はアメリカの捕鯨船二隻に分乗させられ、のこり五名はオアフ島のホノルルに上陸する。このとき万次郎とその仲間——五右衛門、寅右衛門、伝蔵らと会う。のち五名は、アメリカ船で香港にむかい、さらに上海にいたり、そこから川船で乍浦におもむく。乍浦で他の日本漂流六名といっしょになり、帰国する。

*

旧称をサントイッチ諸島といったハワイ諸島は、太平洋上の楽園の異名をとり、こんにち世界中から観光客があつまる島としてなじみが深い。この諸島はちょうど太平洋のまん中に位置し、北緯一八・五七度から二二・一度、西経一五四・四九度から一六〇・三三度におわる。⁽¹⁾ 全島の総面積は一六、七五五平方キロであり、日本の四国よりやや小さい。ハワイ諸島は、大小八つの島と無数の小さな無人島から成っている。東京から州都のホノルルまで約五三〇〇キロを距ている。この諸島のなかで三番目に大きいオアフ島が、これから述べようとする話の中心となる。

日本人とハワイ民族との接触は、日本移民がはじまった明治十八年「二八八五」よりもさらに古い時代——鎌倉時代——正嘉二年しょうか（一二五八）、オアフ島のマカプー岬ポイン（Makapu Point）に二度ほど日本の船らしいものが漂流したことはじまっている。⁽²⁾ ついで文永七年（一二七〇）に、マ



オアフ島のホノルルの風景

ワイ島カフルイ (Kahului) に「ママラ」と呼ぶ船が漂着した。が、その船には、男三名、女二名が乗っていた。この船の船頭は「カルイキアマン」(軽井喜衛門の転訛とも考えられたが、土人語で「難波船」や「漂流小人」の意らしい)⁽³⁾ といひ、男たちは剣も持っていたようである。かれらは日本人(おそらく琉球人)ではなからうかといひ⁽⁴⁾。

同船の船頭や水夫の皮膚の色は、黒くはなかったといひ、のち土着人と結婚し、色の黒くない種族の祖先となったといひ⁽⁵⁾。

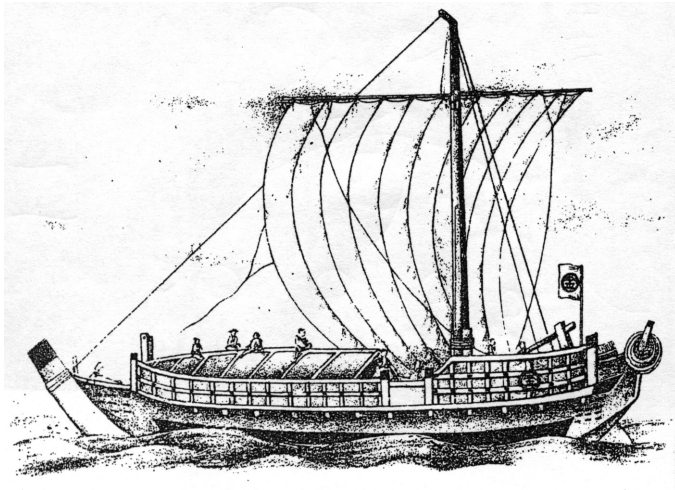
日本側の史料に現われた最初のハワイ諸島についての記事は、いまから約二百年前の文化元年(一八〇四)に、諸島中のいずれかの島に寄港したロシア艦ナデジュダ号に乗っていた仙台漂流民四名の見聞録である。

一 奥州・若宮丸

水主 津太夫 (宮城郡寒風沢浜 善五郎せがれ) ……………	六十一歳
同 儀兵衛 (桃生郡深谷室浜 源三郎せがれ) ……………	四十四歳
同 左平 (宮城郡寒風浜 長九郎せがれ) ……………	四十三歳
同 太十郎 (桃生郡深谷室沢 ?) ……………	三十五歳

注・年齢は文化二年(一七〇五)当時のもの。

この四名は寛政五年癸丑十一月二十七日(一七九三・一二・二九)、牡鹿郡石巻の沖(船頭(運航の責任者)・平兵衛に雇われ、同所の米沢屋平之丞の持船「若宮丸」(八百石積み、御米、御用木などを積んでいる)に乗り、石巻を出帆し江戸にむかった。若宮丸には



千石船の図

船頭・平兵衛以下、十六名が乗組んでいたが、この船は塩屋岬しおやの沖で南西の大風やぐらをこわすほどの大波と遭い遭難した。

十二月一日に舵を折られ、船が危くなつたので帆柱を切断し、積荷をすて、乗組員はもとどり（髪の毛を頭のうえに束ねた所）を切つて神仏に救いをもとめた。船は北西の季節風に吹き流されたまま、太平洋上をあてもなく漂流をつづけた。

長く苦しい漂流生活は、早くも六ヵ月を過ぎ、寛政六年（一七九四）の夏も五月のころ、ようやく雪をいただいた北海の孤島——オンデレック島（アリューシャン列島中のウナラスカ島）の近くにたどり着いた。

この島は断崖絶壁だんがいにかこまれた島だったので、船をたやすくそこに近づけることができなかつた。そこで船を捨てることにし、米三俵と手廻り品を小舟に積むと、十六名もそれに乗り移つた。ようやく草木もはえていない荒涼たる砂浜をみつけたのでそこに上陸した。

やがて人煙をもとめて進むうちに、まず二、三の人影を発見した。ついで三十名ほどの島民がやつて来たが、かれらは鳥の羽や毛皮を身につけていた。島民は思ひのほか親切であり、食物（タラのような魚）や水などをくれた。魚のほうは枯草を燃やし、煮てたべた。同年六月八日、船頭平兵衛は腫気により亡くなつたので砂地に葬つた。

その後の十六名の日本漂流民の動向を年代順にしるすと、つぎのようになる。

一行十五名は、オンデレック島に約十ヵ月滞在し、この間島民やロシアアメリカ会社の総支配人アレキサンダー・バラノフ（一七四七—一八一九）らの世話になつた。

寛政七年（一七九五）……四月バラノフの舟に乗せられオンデレック島を出帆し、カムチャッカに寄つたのち、六月末オホーツクに到着。当時、同地は戸数二百ほどの村であつた。漂流民らは役人の取調べをうけたのち、三班に分けられイルクーツクに送られた。

当時、イルクーツクは戸数二千ほどのシベリア第一の町であり、一行は丸本小屋に泊められ、パンや豚肉などを食べた（荒川秀俊編『異国漂流記集』）。

寛政八年（一七九六）……ヤクーツクで亡くなつた市五郎を除いた十四名は、イルクーツクに集合し、以後約八年間この町でくらしした。

享和三年（一八〇三）……三月上旬、生残った十三名は、総督より、ロシアの首都ペテルスブルクに連れてゆく、と言いわたされた。かれらはロシアの服、股引、靴などを支給され、雪車に乗って出発した。旅はつらいものであり、雪車のうえで食事をとり、排泄のとき以外は下りることができなかった。出発の翌日、左太夫、清蔵ら二名が発病し、イルクーツクに引返した。

残った十名は、トムスク、エカテリンブルク、カザン、モスクワを経て四月末首都のペテルスブルクに到着した。イルクーツクを出発して約五十日後のことである。

五月十六日皇帝アレクサンドル一世に拜謁し、津太夫、左平、儀兵衛、太十郎ら四名は帰国したいといい、残りの六名はロシアに残留することを申し出た。

享和三年六月七日（一八〇三・八・七）津太夫ら四名の漂流民は、ロシア艦ナデジュダ号（艦長はクルウゼンシュテルン）に乗ると、クロンシュタット軍港を出帆した。その後、つぎの諸港に寄港したのち、サンドウィッチ諸島にいたった（日付は洋暦による）。

八月二十日……コペンハーゲン到着。九月十五日、同所を出帆。

九月二十八日……イギリスのプリマス到着。十月五日、同地を出帆。

十月二十日……サンタクルスデテネリフェ（カナリア諸島西部のテネリフェ島の港）到着。十月二十七日、同地を出帆。

十二月二十一日……サンタ・カタリーナ（ブラジル南部）到着。翌年（一八〇四）二月四日、同地を出帆。のち南アメリカの南端（ホルン岬）

を迂回し、太平洋に出た。

一八〇四年五月六日……ヌカヒヴァ（南太平洋上の島。ヌクヒヴァともいう。マルケサス諸島）に到着。五月十七日、⁽⁶⁾同地を出帆し、ハワイにむかった。赤道を過ぎ、三十七日ほど走ったのちサンドウィッチ諸島の近くに艦を寄せた。

日本側の史料にみられる最初のハワイ記事は、津太夫らの見聞録である。

赤道を過ぎて三七日程走り、千五百里程にてサ、ンヘイッケ（サンドウィッチ、すなわちハワイ諸島——引用者）大島辺へ舟を寄す、此島（オアフ島か——引用者）へは、午羊（南南西）の方へ走り着きたり 島の長さマルケイサよりは、大ひ成様に見ゆ、（伊豆の大島程もあるべき歟）島中山も見ゆ、但高山とは見へず、氣候マルケイサ同様に覚ゆ、昼は此島山の根迄船をよせ、夜は沖へ出せり……

ある乗組員はいった。この島は日本の国土に近いだけでなく、日本の前にある海というべきものであり、南東のほうへすこし寄った所である。そういいながら、その乗組員は地図をひろげて示してくれた。

ナデジュダ号は、島民の舟から豚を買い求め、本船に積み入れると、ほかに交易することなしに出帆した。

艦は北上をつづけ、文化元年（一八〇四）七月初旬カムチャッカに到着し、八月五日そこを出帆すると南下し、九月六日長崎に到着した。文化二年（一八〇五）、津太夫ら四名は、梅ガ崎小屋で約半年ほどロシア使節レザノフの乗組員らといっしょに暮らした。

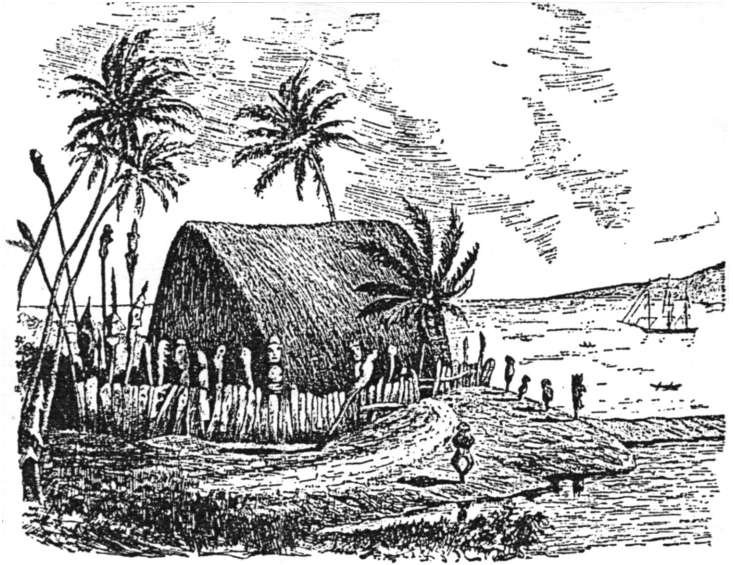
その間に太十郎は発狂し、口に剃刀をつっこんで自殺をはかった。やがて遣日使節レザノフは退去することになり、津太夫らは揚り屋に入牢、切支丹宗門の詮議もすんで、十二月仙台藩に引きとられ故郷に帰ることになった。

帰郷後、津太夫、儀兵衛、左平の三名は、藩主伊達周宗（一七九六〜一八一二）の引見をうけたのち、仙台藩の藩医で蘭学者・大槻茂質（しげかた 玄沢、げんたく 一七五七〜一八二七）や志村弘強（ひろゆき 一七六九〜一八四五、藩校師範）らから、漂流のてん末、外国での暮らしと事情、帰国までの見聞などを、愛宕下の伊達家の別邸においてくわしく聴取され、それを和とし十六巻にまとめ、文化四年（一八〇七）の初夏に完成した。『環海異聞』と題するものがそれである。本書は、日本人として初めて世界一周を体験した者の記録である。

二 安芸国（広島県）・稲若丸

一八〇六年六月十四日（文化三年四月二十八日）のことである。アメリカのロードアイランド州プロヴィデンスの商船「ティバー」号（船長Ⅱコーニリアス・ソウル）は、八名の日本漂流民を乗せてホノルルに入港した。同船が洋上にただよう日本船の乗組員を救助したのは、同年二月二十三日（文化三年一月六日）のことであった。

ソウル船長は、日本漂流民をハワイ国王のひ護にゆだねた。国王は部下に日本人の世話を命じた。ティバー号は、日本人をおろすと直ちに出港した。



オアフ島の原住民の家

日本漂流民らは、安芸国豊田郡木谷浦（現・広島県豊田郡安芸津町大字木谷）の元屋万助の持船「稲若丸」（五百石積み）の元乗組員であった。稲若丸の乗組員は、つぎの七名であり、のち一名加わり八名となった。

沖船頭	吟蔵	芸州豊田郡木谷村
水主	貞五郎	〃
	嘉三次	〃
	松次郎	〃
	和左蔵	芸州大崎東野村
	文右衛門	防州岩国
	善松	？

船は文化二年十一月七日（一八〇五・一二・二七）木谷浦を出帆すると、同月十五日、岩国の浜穴の口に着船し、ここで畳の表や馬の飼葉などを積み込んだ。のち木谷浦にもどり、二十七日まで滞船したのち江戸にむかった。江戸の品川に着いたのは、十二月二十一日。荷揚げののち二十七日に出帆し、同夜、神奈川に着船した。

翌文化三年一月一日（一八〇六・二・一八）神奈川を出帆し、同夜浦賀に着船。浦賀には一月五日まで碇泊した。五日、浦賀を出帆し、下田沖にさしかかると、水主・嘉三次が疝気症（神経痛？）を発したため、急ぎよ下田で岩国出身の惣次郎という者を雇い入れ、同六日の朝勢州（伊勢国の別称）をさして出帆した。

しかし、同日の昼ごろより雨がふり出し、にわかには強い西風が吹くようになり、海も荒れだした。この日から七日まで、風雨はますます激しくなる一方なので、急いで帆を下げたが、船はいよいよ危くなるばかりだった。そこで帆柱を伐りすて、乗組員一同、心をこめて神仏に祈願をかけ、助命を願った。

山影はとくに姿を消しており、船はただ東南とおもえる方向に吹き流されるだけであった。一同助かる望みをすて、髻を切りおとすと、覚悟をきめた。船は同年三月ごろまで、ただむなく洋上を漂うのみであった。この間、雨がふったときは天水を受け溜めおき、粥をすすったりして露命をつないだが、やがて米をすっかり食い尽くしてしまった。

乗組の者は疲れはて、ただひたすら神の加護を願った。そんなとき飛魚を一疋とらえたので、皆に打寄ってこれを食べ、その後帆の縫針を曲げてつり針をつくり、飛魚のわたをえきにしてつり針を下ろした。すると幸いにも鰯が二疋つれたので、日々それを少しずつ塩煮にし、八名で食べた。つづけた。

文化三年一月初旬のある朝のことである。いずこの洋上とも知れなかったが、目の前に大きな異国船をみかけたので、乗組員一同、助けてくれ、と大声で救助をもとめた。苦（すげ、かやなどを菰のように編んだもので、和船の上部のおおいに用いた）をもって振ったところ、大船からボートがおろされ、こちらにやって来たので、一同それに乗り移った。

『芸州善松北米漂流譚』は、このとき日本漂流民を救出してくれたアメリカ船の名称を伝えているが、その船を「モク」または「ワヘモク」と呼んでいる。これは日本人の耳にそのように聞えただけのことであり、正確ではない。

日本の難波船に出会ったのは、中国からアメリカにむかっていた商船「ティバー」(Tabour)号であった。同船は、サンドウィッチ諸島を通る経度線にちかいたところだったので、親切な船長はわざわざ針路を変更し、オアフ島に寄ることにした。

ティバー号に移乗した八名の漂流民らは、米の粥や牛豚の肉、鶏の腹に詰めものをした料理、パン、紅茶などを口にした。やがて日本人を連れて、一八〇六年六月十四日（文化三年四月二十八日）オアフ島に上陸した船長は、ハワイの国王カメハメハ二世に難民の世話をたのみ、日本人には衣類などを与えてハワイをあとにし広東へむかった。

漂流民らは、二日ほど茅ぶきの小屋の土間のうえで寝たが、やがて村長らしい者が従者を十名ほど連れてやって来ると、なにやら指図した。すると山奥のほうから二百名ほどの原住民が材木をもってやって来たと思ったら、二日ほどの間に、四間に五間ほどの茅ぶきの、壁のない小屋を建て、そのまわりには垣根をつくってくれた。そして昼夜、二人の番人が交替で警護した。

小屋の土間のうえに、いぐさに似た草を敷き、その上にさらに「モナイ」と呼ぶ四畳敷ほどのむしろのようなものを敷いた。夜寝るときは、広い紙をくれたので、それをむしろの上に敷いて寝た。



広東府とその周辺の地図

オアフ島での暮らしが四ヶ月になるころ、アメリカの商船が入港した。漂民をどこかの国に送還しようとしている様子だった。それはアマサ・デラノ船長（一七六三〜一八二三）が指揮をとる中国へむかう船であった。一八〇六年九月二十八日（文化三年八月十七日）、八名の日本漂民はボートからその商船に乗り移ると、オアフ島をあとにした。

その異国船の乗組員の髪は、ティバー号にはじめて救助されたときと同じく赤く、顔色も衣類ともに見なれぬものであった。食物は芋や牛豚の肉、魚などであった。同年十一月九日（文化三年九月二十九日）、日本人を乗せたアメリカ船は清国広東省香山県のマカオに着いた。が、上陸せず、やがて錨地を出ると、陰暦の十月朔日（十一月十日）番所のようなところで（広東から十マイル下った所にある「黄埔」whampoaのことか）で船改めを受け、翌日そこを出帆し、川（珠江）沿いに走り、十月六日（十一月十五日）広東（廣州）に到着した。

広東は、珠江（*Chu-kiang*、⁹「真珠の川」の意）の左岸に造られた街である。形はほぼ正方形であり、東西に走る一本の城壁が旧市内と新しい市内をわけていた。¹⁰

広東は家屋が数千もあるような大きな、しかも繁華な町であった。人家は丸石をもって築き、壁には白いしつこい塗りが塗られていた。二階屋が多く、屋根は瓦がしいてあった。外国の商館があったのは、沙面（¹¹広東語で *shameen*）と呼ばれた島である。その数は二十軒ほどあり、各国の国旗がひるがえっていた。

住民のほとんどは中国人のだが、かれらは弁髪をさげ、筒袖のような服を身につけ、股引をはき、革でこしらえた靴をはいていた。食物は米の飯、菜としては魚や卵などをたべ、陽気は日本よりもずっと暖かであった。

ソウル船長は広東に着くと、日本語を識っているという中国人を見つけた。漂民はその者を通して質問をうけたが、その日本語話は理解できなかった。けれど紙の上に書かれた漢字はお互い理解で

きた。このとき筆談で行われた問答は、つぎのようなものであった。

——難破するまえ、どこから出帆したのか？

——日本の大坂の町から。

——大坂を出帆したとき、何名乗船していたのか？

——二十二名です。

——他の十四名の身に何が起ったのか？

——何人かは強風によって、船外に押し流されたばかりか、そのとき帆柱やかじも失いました。そうでなければ、重傷を負った者もいます。露命をつなぐために、殺された上、食料代わりに食われた者も大勢おりました。

命を失った者は、ちゃんとくじを引いて死んだのです。

——ソウル船長から、どのような扱いを受けたのか？

——船長には命を救われたので感謝しております。死が目前に迫っていたとき、われわれを死から救ってくれたばかりか、われわれに食物を与え、無事陸地まで運んでくれました。上陸してからも、われわれの世話をし、必要なものを与えてくれました。⁽¹²⁾

この筆談の記事は、すべて正しいわけではない。遭難する前に出帆したのは、大坂ならぬ岩国であり、乗組員の数は、はじめから八名であった。また飢餓から、共喰いした、とあるが、死体を食べたこともなく、このことは事実無根である。

デラノ船長は漂流を連れて上陸すると、二日ほどの間、オランダ人の商館（広東の中国当局？）のようなところで、日本人の本国送還について交渉したり、公開市場におけるアザラシの皮の値段を知るために、友人でもあるイギリスやオランダの積荷監督人らを訪ねた。⁽¹³⁾ やがて中国当局に漂流民を受けとってもらえないことがわかると、しかたなく日本人を再びもとの船に乗り込ませ、十月十五日（一八〇六・一一・二四）広東を出帆し、ふたたびマカオを目ざした。

マカオを広東と同じように中国人が多く住み、外国からの居留民も多かった。各国の国旗がひるがえった家屋が十軒ほどもあった。戸数は五百ほどかと思われた。港には各国の船が七十隻ほども停泊しており、中には大砲を二段も装備した軍艦のすがたもあった。

漂流民がマカオにおいて帰国を待ちわびていたある日のこと、中国人がやって来て、紙のうえに何やら文字を書いたが、意は通じなかった。しかし、また日本人をどこかへ送るといふことらしかった。十二月二十五日（一八〇七年二月二日）漂流民はジャンクに乗ってマカオを出帆し、文化四年一月二十一日（一八〇七・二・二七）バタビア（ジャカルタの旧称）の錨地に到着した。やがて小舟に乗り移らせられ、一里半ほど掘り割り（水路）をさかのぼり、市場が建ちならぶ町に上陸した。

漂流民が連れてゆかれたのは中国人の酒屋であり、その二階に案内された。食事は米飯、芋、牛豚の肉、エビ、鯛などの塩焼きが出、ときどきアルコール分の多い、強い酒を出してくれた。

バタビアという所は土地が広く、土着民とオランダ人が雑居しているらしかった。どこまでも家屋が建ちつづいていた。大きな家には堀や囲いはなかった。掘井戸はなく、住民はにごった川の水を汲んできて、それを器の中に入れて、澄まして用いた。各家では鶏や豚を飼っていたが、牛の姿をみかけなかった。

昼夜、馬車を用いる者が多かった。当地には寺院もあったが、中国人はめいめい家に観音像をかかげ、朝夕香をたいて礼拝していた。気候は暖かであり、正月でも裕（裏つきの着物）一枚でじゅうぶんであった。このバタビアで、前年日本へ行ったことがあるというオランダ人と知り合いになった。が、その者は、日本語が上手であった。今年、日本へ行く船があるはずだから、百日ほど待てば、その船に乗せて故国に送り還してやる、というので、一同ようやく安心した。

ところが、そのころから、文右衛門、和左蔵、吟蔵、嘉三次、貞五郎、惣次郎らがつぎつぎと病いに患った。病名はできもの、はれもの、マリアなどであり、宿の主人にたのんで医者に見てもらい、養生に手を尽してみたけれど、病勢はおとろえず、まず――

船頭 吟蔵……………病名（心身の衰弱）

水主 文右衛門……………病名（できもの）

ら二名が、四月二十九日（一八〇七・六・五）に亡くなった。両人の遺骸は、中国人にたのんで長い棺の中に入れて埋葬した。

やがて日本行の船が入港した、といった連絡が入ったので、漂流民一同、宿の主人らに世話になった礼をのべ、五月十五日オランダ人が借りた

アメリカ商船「マウント・ヴァーノン」号（註）に乗り組み、同十九日（六・二四）バタビアを出帆した。

昼夜兼行で帆走中、貞五郎、嘉三次、惣次郎ら三人も、船中で亡くなったので、オランダ人と相談の上、三人の死体を水葬にした。かくして六月十八日（二八〇七・七・二三）マウント・ヴァーノン号は、ついに長崎に到着した。

ところが和左蔵は、航海中、ますます病いが重くなり、長崎に着いて日本の土をふまないうちに亡くなった。

かくてわずか二ヵ月ほどの間に、八人ちゅう六人までがあえなく死亡した。死因は、風土病によるものと考えられた。生き残った者といえは、善松と松次郎だけである。兩人は奉行所の揚り屋あが（未決囚が入る牢屋）に入れられ、取調べを受けた。異国にいる間にキリシタン宗門の勧誘にあわなかったか。船に武具類を積んでいなかったか。金銀をもっていなかったか。商売らしいことをしなかったか。通行切手や守り札などを持っていなかったかなど、漂流から帰国するまでの経緯をすっかり調べられた。

松次郎は連日のきびしい尋問やあたら日々を空費していることに耐えられなくなったものか、とりとめもないことを口走るようになり、六月二十一日の夜、牢内で首をくくって亡くなった。善松のほうは、官の医療をうけているうちに、病気が快方にむかい、取調べがおわると、自由の身となり、故郷の安芸国へ帰ることができた。

長崎に帰着して、数ヵ月後のことである。

三 尾張・宝順丸

天保三年十一月二十日（一八三二・一二・一一）、尾張藩の廻米その他の品々を積んだ「宝順丸」（知多半島南部——小野浦おののうら「現・美浜町」の樋口源之所有の帆船、千五百石積み）は、いまの名古屋港を出帆して江戸へむかった。しかし、船は港を出てまもなく、時化にあったので、志摩の鳥羽に入港して、天候がよくなるのを待った。

宝順丸の乗組員（十四名）は、つぎの面々である。

船頭……………重右衛門（源六のせがれ）



尾州の音吉
(別名・オットソン)

水夫……………仁右衛門

利七(金右衛門のせがれ)

三四郎

常治郎(弥右衛門のせがれ)

六右衛門

吉治郎(小野浦の出身、武右衛門の長男)

乙吉^⑧(小野浦の出身、武右衛門の次男、のちに「オットソン」と呼ばれた)

久吉(小野浦の出身、又平のせがれ)

政吉(小野浦のとなり野間村出身)

岩吉(熱田宮の出身)

仙之助^⑨(伊勢若松の出身)

勝五郎(新ヶ居浜の出身)

辰蔵(伊勢波切の出身)

宝順丸は鳥羽浦(三重県東端の港町)で十二日間も天候の回復を待ち、のち出帆したが、ほどなく暴風雨にあい、帆柱やかじを失った。やがて陸地を失い、船の位置もわからなくなり、すっかり進路を見失ってしまった。このときから漂流がはじまったのである。漂流の顛末については、生き残った三名が、後年マカオにおいて宣教師ギュッラフに語った談話にくわしい。

漂流すること十四ヵ月、船は翌天保四年十月か十一月(一八三三・一一、一二)ごろ、現在のワシントン州オリンピック半島の北西突端——フ
ラッタリ岬の十五マイル南——グレンバイル岬の北に位置する——いまのアラバ岬あたりに流れ着いた(バンク・ソングン^⑩「宝順丸の米州漂着と
その意義」『日本歴史』第二九五号所収、昭和47・12)。
方善註

漂流中は、積荷の米と雨水で露命をつなぐことができたが、十四名いた乗組員のうち十一名までが壊血病によって命を失ない、生存者は、

乙音^⑪(当時十六歳ぐらい)

久吉(当時十七歳ぐらい)

岩吉（当時、三十歳ぐらい、郷里「熱田宮」に妻と家族がいた）だけとなった。

上陸してしばらくすると三人は、インディアンに捕えられ、奴隷のように使役された。が、のちにハドソン湾会社のウィリアム・マックネル船長に救出される。生き残った三人は、一八三四年（天保五年）十一月、帆船イーグル号でコロンビア川を出帆し、イギリスにむかった。同年十二月オアフ島のホノルルに寄港。翌一八三五年三月、ホーン岬をへて四月上旬セントヘレナに寄港。六月上旬グレイブゼンド（ロンドン郊外）到着。三人の漂流は、ジェネラル・パーマー号に移乗し、一日上陸をゆるされ、ロンドンを見学した。同船でマカオにむかい、当地に住むギュッラフ師の世話になる。のち三人はオリファント商会の商船モリソン号で浦賀に接近するが砲撃をうけ、むなくマカオにもどる。新約聖書の翻訳を手伝う。三人の漂流は、帰国を断念し、めいめい寧波、上海、シンガポールでくらす（拙稿「オットソン」と呼ばれた日本漂流民」『社会志林』所収五一巻一号、平成16・7）。

四 尾張・督乗丸とくじようまる

帆船時代、暴風にあい、潮流にのってアメリカに漂着した和船は少なからずあったかも知れない。が、史料的に裏付けられる事例となると、けっして多くはないのである。つぎにのべる、督乗丸一行の場合は、なんと太平洋を十七ヵ月も漂流したのちイギリス船に救助され、ついにアメリカ本土に上陸した、世界にも類のないケースである。

尾張の国、名古屋納屋町なやまち——小島屋庄右衛門の持ち船「督乗丸」（千二百石積み、十四人乗組）は、尾張藩が江戸へはこぶ米、その他の商品を積んで、文化十年（一八一三）十月、同国の師崎もろざき（知多半島最南端）の港を出帆し江戸にむかった。

江戸に着くと、廻米や積荷を売り払った。同じ月の下旬、江戸を出帆し、伊豆の子浦こつら（下田の西方に位置する港）に寄港した。十一月四日そこを出帆し、帰国の途についた。夜になると、北東の風がつよくなり、水主たちは帆を下ろそうとして騒ぎあっていたとき、水夫の要吉（名古屋矢場の出身）があやまって海中に落ちてしまった。暗夜のことであり、助けようがなく見殺しにしてしまった。

七日になっても大風はやまず、ときどき大きな波がかぶり込んできた。翌日、はるか西北の方角に山を見たが、これが日本の山の見おさめかと

思うと、名ごりがつきなかった。船頭重吉は日記をつけ、磁石により何々の方角に何日流れて行ったというようなことを記していた。九日目の十二日になって、風はすっかりやんだ。一同狂喜し、小さいながらも舵や帆柱をつくった。

十七日には、水も乏しくなったので、重吉は工夫して蘭引らんびき（蒸留水を取る器具。海水を煮たたせ、管から上る湯気が鍋尻に当たり、しずくとなっておちたものを飲料とする）をこしらえたが、一日に七、八升の水が取れた。食料もとぼしくなってきた。残った五斗入六俵の米を、生き残った十三人で分けると、一人分三升五合になった。

豆だけは百俵あったので、これを粉にし、米に少しづつまぜて食べた。

文化十一年正月元旦（一八一四・二・二〇）、みなみな羽織を着て表に出ると、正月の作法のまねごとをした。このころになると、米はまったくなくなり、豆を煎って砕いた黄粉きんこのようなものだけを食べて、命をつないでいた。

三月ごろになると、乗組員の中から病人が出るようになった。船頭重吉も手足の表皮下に「黒い血」が流れているのを発見したので、カミソリでそこを切って、黒い血を絞り出し、そのあと患部に塩湯をかけたが、たまらない痛さであった。病人の体はむくみ、色が黒くなり、まもなく全身すっかり腫れあがり、床についてしまった。壊血病と呼ばれたものが、それである。

起きているのは重吉だけとなり、いまでは一人で水をくみ、薪をつくり、蘭引らんびきをし、豆を煎いり、病人の看護につとめた。

五月八日（五・二五）から六月二十八日（八・一三）の間に、つぎの十名が亡くなり、生き残ったのは伊豆の音吉、亀崎の半兵衛と船頭の重吉ら三名だけとなった。が、音吉と半兵衛の二人は船底でうなりながら寝ていた。

水主	七兵衛	尾州半田村	五月八日死去	賄さき	孫三郎	尾州半田村	六月十三日死去
舵取 <small>かじり</small>	藤助	尾州半田村	五月十六日死去	水主	為吉	尾州川村	六月十六日死去
かしき	房次郎	尾州半田村	五月二十八日死去	三之助	伊豆国柿崎		六月十八日死去
水主	庄兵衛	尾州半田村	六月十二日死去	重蔵	伊豆国田子村		六月二十日死去
同右	福松	伊豆国子浦	六月十二日死去	安兵衛	伊豆国子浦		六月二十八日死去

八月一日、二日と、十一ヵ月ぶりで初めて大雨が降った。重吉は大いによろこび、鍋釜なべかまをはじめ、水を受けるものなら何でも手あたりしだい出して、じゅうぶんな水を貯えることができた。三日目の朝、海の中がさわがしいので、たぶん魚であろうと思って、ぼけ（カツオを釣るための疑似餌。牛の角でつくり、イワシの形をし、尾のほうに針がついている）を投げ入れたところ、まずカツオを一本釣りあげ、ついで七本釣りあげることができた。

釣りあげたカツオを、はじめ煙突（煙を出すために設けた穴）から船底に投げ入れ、あとから釣りあげたカツオをもって下へ行ってみると、先程のカツオは何と骨ばかりになっていた。それは釣ったばかりの魚が跳ねまわっているところを病床の二人がみつけ、夢かとはかり床から這い出して、生きたままかじりついたものであり、一口食い、二口食っているうちに、思わず骨になるまで食べ尽くしたのである。

二人はあっけにとられている重吉を見ると、この魚はお前さまが下さったものか、神さまが恵んでくださったものかは知らないが、跳ねまわっているのを見ると、思わずそのまま食べてしまった。どうか許して下さい、と。重吉は、いやいや遠慮には及ばぬ、これを見よ、と、釣ったばかりの七本のカツオを見せると、二人は思わずありがたさに拜んでしまった。

さて神さまに初ものをお供えたあと、カツオ四本の身を塩水に漬けて食べた。あら、塩水に雨水を加えて煮て食べたが、その味のよさは何ともたえようがなかった。

長い間漂流していると、船の四方に苔こけのようなものがとりつき、その中にさまざまな虫が寄生するようになる。それを食べようとして、魚はあつまってくる。あるとき、船の外をみると、大きなワニザメが四匹、寄りついてくる魚を食べようと追ってきた。そこで海水を煮たせものや桶などを船上からサメの口の中につき込んだりして、どうにか追っ払うことができた。

音吉と半兵衛は、日夜釣れる魚（カツオ、マグロ、シイラ）などを食べているうちに、にわかになんげになった。またいまでは、雨もときどき降るので水は十分あるし、魚もよく釣れた。

こうして九月の末ともなった。船中で亡くなった十名の死体は、厚さ二寸の松板の上にまっばだかにしてならべてあったが、肉は腐敗したのち干固ぼくごまり、頭も肉が落ちて頭蓋骨だけになっていた。となりの重吉の居間の臭気も耐えがたいので水葬にすることにした。そこで捨てても惜しくない肌を着て、死骸を抱きあげようとすると、ぼろぼろ砕けてしまうので、土を運ぶようにして海へ投げ捨てた。

さて、死骸を捨てて七日ばかりたった十一月の五、六日ごろ、またもワニザメがやって来たが、こんどは四十四匹ほどおり、船の虫を食べにき

た魚をことごとく追い散らしてしまった。そしてサメもどことなく姿を消した。すると釣をしても魚が釣れなくなり、またもとのように豆の粉を食べざるを得なくなった。

十一月二十日ごろになると、音吉と半兵衛がまた病人となったので、重吉ひとりが働く破目になった。

文化十二年（一八一五）正月元旦——おみくじを引いて、神に伺いを立てることにした。すると正月二十七日と二月二十八日ごろ助かるというお告げがあり、またいずれの方角に陸地をみつけれられるかを占うと、東北の方向と出た。

さて、正月二十八日、朝日の光でながめるとたしかに山であったので、ひじょうにうれしかったが、夕方より北風となり、風向きが悪くなった。翌二十八日の未明、西風に変わり、船はぐるっと回転した。夜が明けてみると、二十町（約二キロ）程先に陸地がみえた。よくみれば、谷あいにも家もあろうかと思われるほど、ひじょうに近くに見渡せるのである。

気がせくのだが、はしけがないので陸のほうに漕ぎだすことはできず、もたもたしているうちに船の向きが変わり、陸地から遠ざかりはじめた。気もくじけ、やけくそになって、船の神仏を祠ってある前に倒れ、ふて寝をしようとしたが、眠れなかった。

二月十四日（一八一六・三・二四）の明け方のことである。西南の方向に二本マストの異国船と思われる大きな船が走って行くのを見かけた。その距離は約三里（約十二キロ）かと思われた。帆影は七里、船影は三里というのが定まりであったからである。

重吉はとりあえず、救助を請うといったしるしを掲げたが、相手の船はそのまま行きすぎてしまった。そこで金比羅を拝み、あの船へ近づけてください、と必死にお祈りをする、ふしぎなことに異国船の向きが変わり、こちらの方に来るようだった。

重吉は二人の病人を抱き起こし、着がえなどさせ、みずからも衣服を改めて船が近づくの待った。やっと異国船は、ほど近いところにやって来たが、言葉は通じず、重吉らはお助けあれ、と拜むよりほかはなかった。異国船は、難破船のまわりを三度ほどめぐったのち、一町ばかり隔てた所で帆をおろした。

やがてボートを出すと、男六人乗組んでこちらに漕いできた。ハシゴをおろして、喜び待ちうけていると、異国人が一人ハシゴを上がってきた。ひじょうに大きな男であり、目は黄色をし、羅紗の筒袖つっそでのようなものを着ていた。重吉らは頭を下げ、台風にあい海上で艱難している者です、どうかふびんに思っ命を助けて下さい、といったが、何の答も返ってこなかった。

異国人だから言葉が通じないのであろうと思ひ、浦賀の役所が出した書付を出して見せると、しまえというようなしぐさをした。乗組員は十四

名いたが、いま三人だけとなったことを身ぶりで知らせると、相手はすこしわかった様子をしめし、ついで船底へ下りて行って、すみずみまで調べ、他にまだ人がいないか点検した。また口をさして、何を食べているのかと尋ねるようすなので、黄粉をなめてみせると、異人もそれをなめた。やがて異人は右手を伸ばすと、こちらの右手をつよく握りしめた。かくして三人は異国船に乗り移ることになったが、船を乗り捨てることは、肉親と別れるような気がするもので、ボートに乗っても、名ごりおしく、ふり返ると、涙にくれ、目もかすんだ。異国船に乗り移ると、重吉らは船室に案内され、椅子のうえにすわるようにいわれた。

重吉ら三人の漂流民を救ったのは、アメリカの毛皮商人ジョン・ジェイコブ・アスターの持船「フォレスター」号（船長はウィリアム・J・ピゴット、航海長はアレクサンダー・アダムズ）であった。フォレスター号が督乗丸と出会った地点は、カリフォルニア州サンタ・バーバラのポイント・コンセプシヨンの西南西約三〇〇マイルの沖であった。

フォレスター号（元の船長はジョン・ジェニングスという）は、船主アスターの命をうけて船の購入と商品（リネン、ラム酒）の買付けのためにロンドンに赴き、一八一三年のはじめロンドンを出帆すると、ホーン岬を経て、オアフ島のホノルルに着いた。このとき船内で暴動が起こったために、船長ジェニグズに代ってピゴットが新たに船長になった。

ピゴットはアスターの命令に従い、ホノルルからカリフォルニア海岸へ回り、インディアンから毛皮を購入したのち、シトカ（現・アラスカ州南東部、アレクサンダー列島中の町、旧ロシア「アメリカの首都」）に針路をとり、ロシア「アメリカ会社支配人バラノフにリネンやラム酒を売る」としたが、取引は成功しなかった。

そこでフォレスター号は、荷を積んだままひとまずシトカを離れると南下をつづけ、カリフォルニア湾内で越冬したのち、春にもういちどシトカに向うことにした。同船が日本の難破船と出会ったのは、ちょうどこのときであった。

フォレスター号の水夫は二十七名、そのほか猟師のような者が多数乗り組んでいた。重吉によると、船長ピゴットは誠実で親切な人であり、三人を厚くいたわってくれたという。

異国船に乗り移って数日もすると、三人の漂流民も落ちついて来たし、食物も十分にあたえられ、何ひとつ不足はなかった。ある日の午後のことである。ピゴットは食卓の上にくわしい日本地図を広げ、「ジッパン（ジャパン）」（日本）とか、「ミヤコ」「キューーシュ」「エド」などというので、日本のどこの者か、と尋ねているのだらうと思ひ、尾張らしいところを指差し、江戸までなぞった。

すると船長もわかったようであった。こんどは重吉がビゴットに、どこから来たのかと身振りで質問すると、「ランダン」「ランダン」（ロンドン）と数回繰り返した。重吉らはランダンという国を聞いたことがないので、きつとそこはオランダであろうと思った。

フォレスター号は重吉らを救出したのち、北東をさして走っているようであり、やがて一週間ほどすると、港と思われるところに碇をおろした。そこでビゴット船長はじめ七人は、重吉だけを連れて上陸した。

一行が上陸した所は、ノバ・イスパニア（現・カリフォルニア）のコンセプションカレフュージオといった近郊の小さな村であると考えられている。⁽¹⁵⁾陸に上がると、十四、五人の者が馬をひかせて迎えに出ていた。重吉は船の乗組員のものと同様な服を着た異国人をみて、長崎逗留のオランダ人であろうと思った。

重吉と異国人らは、馬にまたがると、谷間や小麦畑の中を一里ほど進んだのち、白壁の家が十五、六軒もある村にやってきた。やがてその内の一軒に入ると、男女二十名ほどの者に出迎えられた。ビゴット船長は重吉を皆なに紹介した。そのときの様子では、難破のもようを皆に言いつきかせているようだった。

重吉はその白壁の屋敷で歓待をうけ、屠殺の方法や肉のさばき方、肉料理の方法などを見学したり、その地の知事（名はオルテガ、二十五人の子持ち）と会ったりした。そのとき、フォレスター号に、仲間二人が病床にある、というと、知事は自宅にひきとり、養生させようと申し出た。

船は入江に碇泊ちゅう、薪水、塩漬肉、豚十一頭、その他の品々を積みこみ、十一日目に出帆した。ボデガ、アラスカ州のノーフォーク・サウンドを経て、六月下旬ごろシトカ（アラスカ州南東部の港町、一七九九年ロシア人パラノフが町を建設し、皮革の交易地として発展）に到着した。シトカには八隻ほどの船が碇泊していた。ここは日昼でも雨天のときのように、毎日霧のようなものがこもり、晴れわたった空はみられなかった。太陽も月も星もみられず、六月でも雪がふった。

船が入港すると、港内に碇泊中の船はそれぞれ酒盛りなどをし祝った。ある日のこと、重吉はシトカ第一の名士パラノフの招待をうけた。かれの屋敷は海を見おろす丘の上にあった。日本の着物を着用して来てほしい、ということだったので、その通りにした。

パラノフの大邸宅には、警護のコサックが大勢いた。邸内に入ると、高い階段、ガラス窓、大広間などがあり、眼下に見下すシトカ港の景色はすばらしいものであった。重吉はパラノフに案内されて大広間に行くと、三十人余りの船長級の客人が飲み食いしながら談笑していた。

重吉は立食パーティに不慣れなため、椅子によりかかってそれを見ていると、パラノフは重吉の手をとって、奥の別室へと案内した。その部屋

には艶めかしい、華やかに着飾った美女が六名いた。パラノフはその女性らに何かをいうと、すぐ一人が額ひたいと両肩と胸へ手を当てて拝むさまをし、ついで両手で重吉の頬をおさえて口づけをした（玉井幸助校訂解説『船長日記』巻之三、一一八頁）。

その他五人の女性も同じようなことをしてから、もとの椅子にすわった。やがて主人のパラノフが部屋から出てゆくと、あとには重吉ひとりと女六人が残った。女性らは氷砂糖、茶、その他いろいろなものを勧め、重吉をみてはくすくす笑う。重吉は何が何だかさっぱり分からなくなり、ひどく心配になった。聞えてくるのは、歌ったり踊ったりする声や音だけである。

夜も十時を過ぎるころ、客の大半は帰ってしまい、残ったのはロシア船の船長二人と重吉だけとなった。女性らは重吉を先程の部屋に案内すると、椅子にすわらせ、いろいろな品物（剣、鉄砲、合羽、獣の牙など）を持ってきて与えた。

やがてパラノフは、今夜はこの女の一人とここに泊まれ、といったが、主人のいう通りにすると、悪い結果をまねくと思ひ、やっこのことで朝の四時ごろロシア人の船長らと船へ帰ることができた。

その後、重吉ら三人は、七月三十一日シトカを出帆すると、カムチャッカ半島のオホーツク海を目ざし、九月十二日アワツカ湾のペテロパヴロフスク（カムチャッカ半島南部東岸）に投錨し、ここで越年の準備にかかった。

ルダゴフという名の地方長官は、船が港に入いかりって碇を下ろすと、「日本人、日本人」と呼びかけ、重吉らを驚かせた。この地に兵庫の高田屋嘉兵衛へい（二七六九〜一八二七、江戸後期の海運業者、国後島クナシリで水夫四名とともにロシア船に捕えられ、カムチャッカへ連行された）が人質として滞在していたとき、少し日本語を覚えたのである。

九月一日ごろ、アワツカ湾にロシア船が一隻入港したが、同船には薩摩の漂流民三名（船頭・喜三左衛門、その弟角次、佐助）がのっていた。この三人は、薩摩の御廻米を江戸に運ぶ永寿丸の乗組員であったが、途中紀州灘で難破し、半年のあいだ漂流し、その間乗組員のほとんどが死に、三人だけとなった。漂流六名は、ルダゴフ長官が提供してくれた一間でいっしょに暮らすようになり、帰国できる日を待ちわびた。

翌文化十三年（一八一八）五月末になると、オホーツク海の氷もとけはじめたので、六名の日本人を送還する用意がととのった。フツエトルという二千石積みほどの二本のマストの船が用意された。乗組員は――

船長……………スレスズニ

船頭……………ベケツ（イギリス人）

書記……………ベネツ

水夫……………名前不明

のほかに、薩摩・尾張の漂流民六名。その他便船の者——男女あわせて六十八名。

このロシア船は五月二十八日カムチャッカの港を出帆し、南南西の方向をさして走った。六月十一日かねて病んでいた尾張の水主、亀崎生まれの半兵衛は、不幸にして船中で病死した。そのため水葬にした。

六月二十八日の午後——薩摩の三人と、重吉・音吉ら計五名は、はしけに乗り移り、ウルツツ島（ラッコ島）の北東の砂浜に着いた。はしけを陸地に引きあげ、その下で野宿することにした。腹もへったので豚肉を煮ていたら、そのにほいをかぎつけて熊がぞろぞろと出てきたので、一晩じゅう鉄鉋を撃って追いはらわねばならなかった。

七月七日の夜八時ごろ、エトロフ島の北東のはずれに着いた。ここは日本の島であるため、皆々大いによろこび合った。岸に沿って航行し、陸に上ったら、小屋を一軒みつけた。その小屋にはアイヌ人が住んでおり、その者の案内で、シヒトロに案内され、そこではじめて日本の下役人と会った。役人は一行がロシアの服を着ていたのでびっくりした顔付をした。

役人は漂流民の話を通り聞きただと、入湯させたうえ、衣服を改めさせ、月代をそらせ、持物をすべて封印してしまった。粥を二盛りずつ、じょじょに食べさせてくれたが、長い異国生活において、肉食になれてしまっていたので、急に米をたべたので腹のぐあいがおかしくなった。

その後、当地から四十六里はなれたフルエツの町へ赴いたが、ここにはりっぱな番屋もあり、調役下役六、七名、同心二十人ほどがいた。また高田屋嘉兵衛の会所（取り引き場）もあって、高田屋の大船が三艘停泊していた。ここでまたひととおりの尋問がおこなわれた。

数日すると、衣服や合羽など、旅に必要な品々をあたえられ、八月二日当地をはなれネムロ（根室）をめざした。海上を五里ほど行き、そこから砂浜を三里ほど行ってノッケウ（現・野付、アイヌ語で「あごの岬」に由来）というところに着いた。そこから松前（旧称・福山、北海道南西部）の東の入り口に到着した。九月二日の午後四時ごろのことである。

函館から組頭と同心が四人来た。漂流民らは蔵町というところにある牢屋敷へひっぱり、その牢に入れられた。やがて函館奉行所に呼びださ

れ、調べがはじまった。十日ほどきびしい尋問がおこなわれた。切支丹宗に帰依していないか、キリストの肖像をもっていないか尋ねられた。六日ほど入牢したのち、江戸に送られることになった。

十一月四日、松前藩の永昌丸で松前を出帆。海上七里を走り、三厩みうまやに上陸し、それより陸路江戸をめざした。江戸霊岸島すみだがら（隅田川河口の西岸）にあるエゾ会所の長屋に到着したのは、十二月四日のことであった。奉行はたびたび同所にやってきて取調べをおこなった。

五ヵ月後の文化十四年四月四日——尾州藩に引き渡され、同藩の江戸屋敷で半月ほどすごしたのち、四月二十日ごろ名古屋へむかった。名古屋に着いたのは五月二日ごろである。ここでもひととおりの取調べがあったが、重吉は一族の者と対面を許され、互いに再会をよろこびあった。

その後、重吉は故郷の半田村に帰った。帰ってきて一ヵ月ほど経つと、尾州藩のおかかえの水主に召しだされ、七石二人扶持をたまわった。かれは苗字帯刀をゆるされ、小栗重吉と名のつた。しかし、かれの頭から片時も離れなかったのは、漂流中に仲間と言いかわした約束である。もし生き残った者があつたら、死んだ者のために石碑を建てて供養することである。

しかし、乏しい俸給でもって妻子を養わねばならぬ重吉には、石碑を建てる金がなかなかなかたまらなかつた。そのうちに外国から持ち帰った衣服や器物を一般に公開したり、寄付をうけたりして、二十両ほどの金がたまつたので、ようやく供養塔を尾張国愛知郡笠寺村かきでらの笠寺かきでらに建立することができた。

五 備前児島こじま（現・岡山県南東部）の漁夫クエモン、ヒロ（ハワイ島東部）に上陸。

文政二年（一八一九）——備前児島の漁師クエモン（九衛門？）は救助され、ヒロ（ホノルルの南東三五〇キロ、ハワイ島東部）に上陸滞在した。天保十年（一八三九年）に、漂流民・平四郎の通訳をしたという。クエモンは、日本刀と羽織を残したとの口碑がある。¹⁶

文政十年（一八二七）——大坂の商船がオアフ島に漂着。日本貨幣（一朱銀、二朱銀、寛永通宝など）二十三枚とキセルなどをホノルルの役人に残したという。

文政二年と同十年の日本人のハワイ島とオアフ島の漂着については、日本側の記録は残されていない。

六 日本漁船（船名未詳）のオアフ島漂着。

天保三年十一月二日（一八三二・一二・二三）——乗組員四名の日本漁船がオアフ島のワイアレア（Waialea）ちかくに漂着し、⁽¹⁷⁾同地で五、六日すぎし、十一月十一日（一八三三・一・一）ホノルル回航中、バーバース岬（Barber's Point）で難破した。⁽¹⁸⁾生存者四名は、十八ヵ月間ホノルルに滞在したようである。これはハワイ史書に記された最初の日本人漂着の記録という（山下草園著『日本布哇交流史』大東出版社、昭和18・1、一一一頁）。なお、これと同じ記事が、『ハワイ日本人移民史』（布哇日系人連合協会、昭和39・4）にもみられる。

日本文献に表われたこの記事の出所は、『ハワイアン・スペクティター』誌（第一巻、二九六頁）であろう。エドワード・ベルチャー艦長の『世界周航記』（Cap. Sir Edward Belcher, R. N.: *Narrative of a voyage round the world...* [1843]）の三〇四〜三〇五頁にも、おなじ記述がみられる。

七 越後国（現・新潟県）の船（船名未詳）オアフ島に漂着。

天保五年（一八三四）——越後国早川の角長の船子——次郎右衛門、伝吉、長太その他計七名がオアフ島に漂着した。一行はカムチャッカ経由で日本に送られた。役人パピュに内側朱色の日本の黒い椀（木の容器）と梅干一つを残したとの記録があるという。⁽¹⁹⁾

八 越中（現・富山県）・長者丸

富山古寺町の能登屋兵右衛門の持船・長者丸（六五〇石積み）には、つぎの面々が乗りこんでいた。

沖船頭

平四郎（五十歳ぐらい）

（越中国富山木町浦〔富山市内〕吉岡屋）

天保十年十月二十三、四日（一八三九・一一・二八〜二九）ごろ、ハワイのオアフ島で病死。

親司（船頭の次席）

八左衛門（四十七歳）

（越中国射水郡長徳寺村〔富山県新湊市内〕京屋）
天保十四年五月（一八四三・五〇六）帰国。嘉永元年三月五日（一八四八・四・八）江戸で病死。

同右

八左衛門（五十歳ぐらい）

（越中国射水郡放生津〔富山県新湊市〕新町）エゾの松前城下で金六と交代し、帰村。

表（入港のとき船の指図をする）

金六（四十九歳）

（下越後岩船郡早田村〔新潟県岩船郡朝日町〕
天保十年四月十五日（一八三九・五・二七）ごろ、船中より投身自殺。

岡使（荷物の出入り、船内の入費

太三郎（三十七歳）

などの事務をあつかう）

（越中国新川郡東岩瀬〔富山市内〕田地方）
天保十四年五月（一八四三・五）帰国。嘉永二年五月九日（一八四九・六・二八）病死。

九・六・二八）病死。

片表（錨のあげおろし役）

善右衛門（四十歳ぐらい）

追廻（雑用係）

六兵衛（三十一歳）

（越中国射水郡放生津〔富山県新湊市〕古新町）
天保十四年五月（一八四三・五〇六）帰国。

同右

七左衛門（八左衛門の弟、二十三歳）

（越中国射水郡放生津〔富山県新湊市〕新町）天保十四年五月（一八四三・五〇六）帰国。同年十月十三日（一八四三・一二・四）江戸で病死。

病死。

同右

次郎吉（二十六歳）

（越中国新川郡東岩瀬〔富山市内〕）
天保十四年五月（一八四三・五〇六）帰国。

炊（すいじ係）

五三郎（二十五歳ぐらい）

（越中国婦負郡四方〔富山市内〕）
天保十年一月二十四、五日（一八三九・三・九〇）ごろ、船中で病死。

病死。

同右

金蔵（十八歳）

（越中国射水郡放生津〔富山県新湊市〕新町）
天保十四年五月（一八四三・五〇六）帰国。

長者丸には、金六をのぞく船頭・平四郎以下合計十名が乗りくみ、天保九年閏四月二十三日（一八三八・五・一六）、東岩瀬川（現・神通川）の河口から西岩瀬（富山市内）にむかい、同地において大坂への廻米五百石を積み、翌二十四日（五・一七）出帆した。五月下旬に大坂に着くと、富山藩の蔵屋敷の役人に無事廻米をとどけた。

ついで長者丸は、大坂において越後（新潟）に運ぶ綿や砂糖やその他の品々を積みこむと、六月中旬に出帆した。七月上旬新潟に着き、荷を問屋にわたすと、エゾの松前にむかい、同地には八月中旬に到着した。一行は九月半ばごろまで、松前の問屋・上田忠右衛門方に滞在した。この間に八左衛門（放生津出身）は、東廻り（日本海より津軽海峡をへて江戸にいたる航路）の航海をきらい、船をおりて郷里に帰ったので、代わりに越後人の金八というものが雇われた。

九月の末か十月のはじめに箱館に入港し、ここでコンブを五、六百石積みこみ、南部領・田の浜（岩手県下閉伊郡山田町）にむけて出帆し、十三、四日ごろ田の浦に着き、半月ほど同地に滞泊した。この間に船に積みこんであった三十俵の米のうち二十俵を売って、塩引きの鮪（マグロの成魚）百本あまりと換えた。

田の浦（四里ほど陸地へ入り込み、船だまりがある）に停泊ちゅうに、一向宗の坊主が来て読経をあげたり、巫女が来て神棚にお祈りをあげたが、巫女はこの船は気をつけたほうがよいと警告した。また湾内にある弁天島でふしぎな出火があり、たくさんの草木が燃えた。宿の者は、どれも縁起でもないことだから、気をつけるようにいったが、乗組員はだれもそのとき深く気にとめなかった。

二十三日の明けがたより順風が吹きはじめたので、港に停泊ちゅうの三十隻あまりの船は、出帆の用意をした。長者丸は朝の八時ごろ出帆した。十時ごろより強い西風が吹くようになり、船はだんだん沖に流されていった。

この日から数日、積荷のコンブと塩引きの鮪などの大半を海に投げすてた。金華山（東西四キロ、南北五キロの島）を間近かに見たが、それらだんだん遠のいていった。もうこれでは陸地へもどることができない。せめて船を沈没から守ろうと、帆柱を切りたおし、船首のほうに錨を二つおろし、吹き流されるのを防いだ。大風はいつこうに衰えず、一同は昼夜をわかつたず、すこしでも陸地から遠ざからぬように働かねばならなかった。

風と高波、みぞれや雪、寒さに悩まされた。船はたえず揺れうごいていたから、粥のようなものを口に入れた。二十八日の朝になると、波も静まり、風むきも東にかわったので、帆柱の代りに帆桁を立て、錨もまきあげた。が、翌日の明けがたからまたもやみぞれまじりの西風となった。

十一月一日になると、また東風に変わった。が、すぐまた烈しい西風となった。そのうちに帆桁も風によって吹き折られてしまった。食糧の米は、二俵しかなかったたので粥にして食べた。一日に米二合を十人で食べることにした。きざんだコンブを粥に入れたり、塩鮪を雨水に海水を加えたなかに入れて、煮て食べた。

天保十年（一八三九）正月のはじめごろから、暖気を感じるようになった。郷里の三月ごろの陽気である。長いあいだ雨が降らないため、貯えの水が底をつくようになった。一同のどの渴きにたえられず、腰に縄をつけて海中にひたったり、海水をがぶがぶ飲んだあげく、急に体が衰弱し、息をひきとる者まで出た。

三月末ごろになると、暖気が増し、日本の六月ごろの暑さをおぼえるようになった。ある朝のこと、久しぶりに雨がふったので、皆おもう存分雨水をのんだ。やがて乗組員の中から死人が出た。

炊 五三郎……………三月二十四、五日の夜半、死去。

片表 善右衛門……………四月十二日ごろ死去。

表 金六……………四月ごろ死去。

三人の遺体は海へ沈めた。

天保十年三月二十四日（一八三九・五・七）ごろになると、生き残った七名は、ミッドウェー諸島付近を漂流していたが、もちろんかれらはそのことに気づいていない。長者丸の漂流者は、四月ごろアメリカのナンタケット島の捕鯨船ゼームス・ローパー号（船長キャスカート）に救助された。同船は三本マストの船であり、長さ二十八、九間、幅七、八間、舷側に十六の砲眼がついていた。またボートを八隻のせていた。

一同が救助された地点（ミッドウェー沖）は、のちに追廻の次郎吉がマウイ島の牧師から聞いたところによると、

東経一六九度

北緯三三度

であった。ローパー号の乗組員は三十人ばかり、船内には小銃四、五挺のほか、大砲が四門みられた。

救出のてん末はこうである。外国船から五、六名ずつ乗り組んだボートが二隻おろされると、こちらにむけてやってきた。三、四人の外国人が長者丸に乗り移ると、身ぶり手ぶりであちらのボートに乗り移れといった。

が、皆からだが衰弱していて足腰も立たぬ状態であった。そのため外国人に助けられ、やっとのことでボートに移乗することができた。やがて七名の日本人は、船長の部屋に導かれた。テーブルの上には、酒のようなものを入れたガラス製の徳利（ぶどう酒入れか？）が置かれ、テーブルのまわりには椅子が七つ並べてあった。

やがて一同に一合入りほどのガラスの杯がくばられると、酒のようなものをついでくれた。船長はそれを飲むようにいった。それはよい香りと甘い味のする酒（リキュール？）であった。皆もう一ぱい飲みたいな、とささやいていると、酒杯をさささと下げてしまった。

つぎに出されたものは、浅い茶わんのような器に米粥を半合ばかり入れて、砂糖をかけたものであった。一同さじを用いて、その米粥を昼から夕方までかかって三度たべたが、腰が抜けていたのもなお、体力がついたような気がした。

長者丸は、夜中航行する船舶のじまになることもあるので、船長によって焼却された。夜になると、七人の者は船尾の部屋に案内され、水夫たちといっしょに寝るようにいわれたが、命を救われたうれしさのあまり眠ることができず、一晩中、語りあかした。

翌日も朝昼晩と米粥をすこしずつあたえられたほか、パンも供された。一週間ほどすると、船長の食事とおなじものがあたえられた。

粥　　パン　　塩つけの牛肉、豚肉の煮たもの。豚や鶏の生肉　　芋など。

救助されて三、四日すると、行水をつかわせてくれた。このとき石けんというものを初めて使ったが、泡が立って垢がきれいにとれた。体を洗ったのち、洋服や帽子をあたえられ、着替えを命じられた。

漂流はとりたててする仕事もないので、ごろ寝をしていると病気になるぞと注意され、ときに呼びおこされることもあった。その後、十四、五日のあいだに、何隻もの捕鯨船を目撃したが、どうやら日本の漂流民を日本へ送り還す相談でもしているようだった。

一ヵ月ほどたったころ、ローパー号はニューヨーク号、ネウカヤウ号、ニューベルク号といった捕鯨船と洋上で出会った。これらの船は、漂流民のうちの何人かを引き取るようになった。

ゼームス・ローパー号……沖船頭・平四郎

次郎吉

金蔵

太三郎と六三郎は一人ずつ、八左衛門と七左衛門は二人で一組となって、それぞれ三隻の捕鯨船に分乗することになった。

なお後日談になるが、これらの船は、ハワイ諸島に着いたとき、太三郎や八左衛門、七左衛門らは、直接オアフ島に行った。のち後者の二人はマウイ島（ハワイ島の北西に位置）を見物する機会をえた。

本船（ゼームス・ローパー号）に残った、平四郎・次郎吉・金蔵ら三人だけは、ハワイ島のヒロの港をみる事ができた。

ゼームス・ローパー号にとどまったこれら三人は、それから五ヵ月ほど船中ですごした。その間にこの船は鯨を八頭しとめた。平四郎らは、刃物をとぐために、ろくろをまわす仕事を手伝った。

捕鯨のしごとが一段落した九月中旬ごろ、ハワイ島から二里ほど離れた地点に達した。このとき本船の信号旗をみて、カナヌにのった広東商人が二人やってきた。二人は船長と何やら話をしたのち、漂流民にむかって本でも見せてくれ、といったので、航海案内の本をみせてやると、半分しか読めないといった。

やがて本船は水深をはかりながら、ハワイ島のヒロ港内に入ると、静かに錨を投じた。岸につくと、広東商人がまず下船し、そのあと船長といっしょに平四郎らが上陸し、広東商人の住居へとむかった。商人の家は間口五間、奥行十間あまりの規模であり、屋根はかやぶきであった。窓はガラス張り、戸は洋風の横開きになっていた。

それはけっして広い家ではなかったが、まずまずの住居であった。床は板張りではなく、ござのようなものが敷いてあった。室内にはガラスの食器類のほか、多くの書物がみられた。ごちそうを出し、三人を歓待した。その晩、三人は商人の家にとまった。

その夜もふけたころ、三人は蚊帳の中で寝ていると、商人は土人の女を連れてやってきた。その気はないか、という。カナカ人と呼ばれる原住民の女を連れてきたのは、船長のはからいによるものだった。商人も島のカナカ人を妾にしていた。

ヒロの港町には、教会が三つある。そのうちもとも近くにあるものは、山上の教会である。牧師夫妻はアメリカ人であり、三人はじめてアメリカ婦人と四、五歳くらいの子どもをみたが、婦人は赤毛ぼく、きらびらかな洋服を着、美しくとやかであった。牧師はスイカやまくわうり、バナナなどを出してもてなしてくれた。

教会からの帰りみち、ゼームス・ローパー号の水夫たち、六、七名と出会った。そのうちの半分は、カナカ人である。三人はこの者たちにひっぱられて遊女屋へ連れていかれた。毒虫やとかがうようよいる細道を行くと、せいの低い大小の家が十四、五軒あった。いずれも屋根を甘蔗（さとうきび）の葉とか、かやや椰子の葉でふいた、四方の壁もこれらの葉で編んだだけの簡素な家である。そこにひとりずつ土人の娼妓がいた。一同は大きな構えの娼家に入ると、本船からさげてきたブランデーやヴァイオリンをもちだし、鶏や豚を料理し、のめや歌えの大さわぎをはじめた。その後、水夫たちは三人の日本人に女を勧めたが、皮膚の黒い島の女は、なんとなく気色がわるかったので遠慮し、きた道をとって返して、その夜も広東商人の家にとめてもらった。

数日後、ゼームス・ローパー号の船長は広東商人の家にやって来て、日本人を帰国させる方法について相談したが、商人は三人の日本人を帰らせる気はなく、なにかのしごとに使うつもりであった。そのため平四郎らは商人宅を抜け出ると、ゼームス・ローパー号にもどった。四日後、船はマウイ島のラハイナ港にはいると、三人は下船し、アメリカ人の牧師パラオインンの世話になり、その後四、五日すると、快速艇でオアフ島に送りとどけられた。

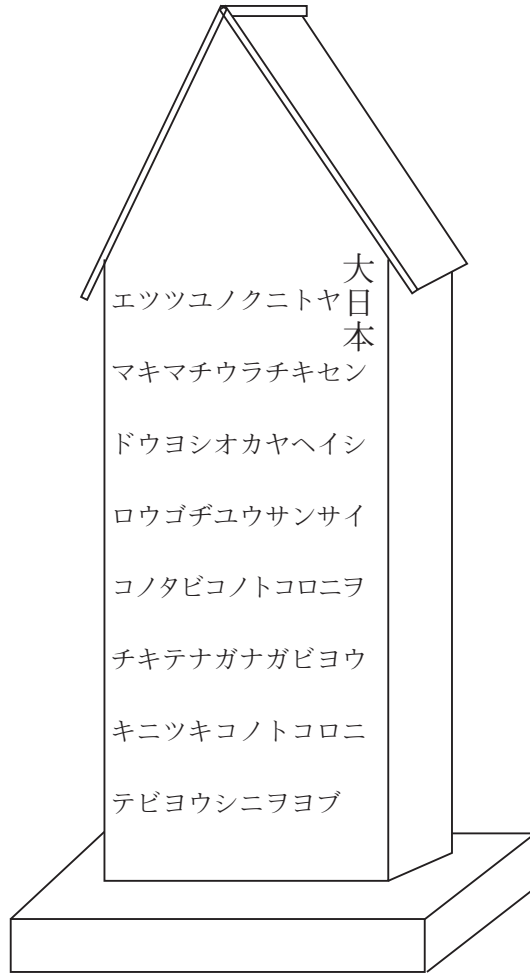
オアフ島に上陸すると、身のまわりの品を車に積んでカオカ人の家にいき、その世話をうけることになった。パラオインン牧師が紹介してくれたのは、ハイラム・ビンガムという牧師であった。その住居は、三人が世話をうけるカオカ人の家の真むかいにあり、その左隣りは印刷所であった。

三人の漂流民は、オアフ島の政庁や市場や諸所を見学してまわったが、それから一ヵ月ほどすると、沖船頭の平四郎が病気になる、間もなく息をひきとった。天保十年十月二十三、四日（一八三九・一一・二八、二九）ごろのことである。平四郎はりっぱな人物であったようだ。葬式はビンガム牧師の世話でおこなうことになった。

平四郎の亡骸は木棺におさめられ、その上に厚手の布がかけられた。棺は車にのせられ、それを土人たちがひいていった。墓地に深さ七、八尺（約二メートル四〇センチ）の穴が掘られ、そこに葬られた。葬列の先頭に立ったのはビンガム牧師であり、そのうしろに会葬の人びと三百人は

どがつづいた。棺が墓穴の中におろされるとき、牧師は経文をあげた。

墓碑は、高さが四尺（約一メートル二〇センチ）、幅一尺（約三〇センチ）ほどのもので、頂部に三角形の小さな屋根がついていた。表面は白く塗られ、その上に平四郎が漂流してから病死するまでのあらましを記すようにいわれたが、漂流は無筆であったから困ってしまった。さいわい次郎はカタカナを書くことができたので、黒い瀝青（ペンキのようなもの）を使って、つぎのような碑文をかいた。



平四郎の墓碑

大日本

越中の国富山木町浦、直船頭・吉岡屋平四郎五十三歳、このたびこの所（オアフ島）に落ち来て、ながなが病気につき、この所にて病死におよぶ。

次郎吉はいわれるままに碑文を書きおえると、ハイラム・ビンガム牧師は、これを英訳してノートに書きとめた。かれはいった。後日、日本人がこの島に来るようなことがあったら、くわしく話をするときの証拠にするつもりだ。またいづれアメリカから石材を取りよせ、本式の墓に改めよう。

平四郎の墓のまわりに三尺（約九〇センチ）あまりの柵もつくられた。またかたわらに三つの石碑が並んでいたが、その年のうちに相次いで亡

くたった牧師の三人の子どもの墓であった。

次郎吉ら三人は、オアフ島のホノルルに来てから広東商人パペーヨ方に滞在していたが、やがて牧師カオカの家に住宿した。その後、次郎吉だけはふたたびパペーヨ方に移った。

天保十年十二月（一八四〇・一）——次郎吉、八左衛門、七左衛門、六三郎らは、広東商人パペーヨの甥ジョンと広東人らとともにマウイ島のラハイナにおもむき、砂糖のしぼりかすを入れる小屋をつくるしごとに従事した。同年五月になると、ホノルルに軍艦が入港したとの報に接したので、次郎吉らはこおどりして喜んだ。

ジョンは賃金をじゅうぶん出すから、当分ここで働くようにいい、一同を引きとめようとした。が、漂民らは逃げるようにジョン宅を出ると、徒歩で山越えてラハイナに行き、そこからカヌーに乗ってホノルルに帰った。帰途、次郎吉らはライナイ島に立ち寄り、製塩の状況などをみた。

折からフランスの軍艦が停泊中であった。広東経由で帰国する計画は、アヘン戦争がおこったために危険であると、フランス人からいわれ、中止せざるをえなくなった。七月になると、次郎吉ら六名はアメリカ商人カーター（もと船長という）の世話で、セン船長のイギリス船（ハーレクイン？）に乗せてもらいカムチャッカ半島南部のペトロパヴロフスクに行くことになった。カーターはオアフ島に店舗をかまえる商人であったが、かれは雑貨・砂糖・メリケン粉などをイギリス船に積み込み、妻子をとめないカムチャッカにむかうところであった。

セン船長は、二十四、五歳の豪放な男であった。ひげ面の飲兵衛であった。オアフ島を出帆し、三、四十日たった八月の末ごろ、カムチャッカのペトロパヴロフスク港に到着した。ここは基地の町である。きびしい寒さは、膚を刺すばかりであり、折から雪まじりの西風がはげしく吹きつけていた。船は港の入口に五、六個ある島のあいだをぬって入港した。

この町の役所の長は、メッテルといい、長官の役を代行していた。かれは次郎吉ら六名を兵舎に住ませ、一方、使いをイルクーツクに遣わして、日本漂民の処置について指示をあおいだ。一行は兵舎に入れられ、毎日兵士の教練を見物してのしんだが、いちばん困ったのは食事の粗末さであった。長いあいだアメリカ式のご馳走を食べてきたから口が肥え、まずいものが食べられなくなっていた。たとえば、食物はつぎのようなものが出された。

朝………茶と大きな円形のパン。

夜 } …… スープ粥とすこしばかりの牛肉。

湯はサモワール（卓上用茶湯わかし器）でわかし、それがにえたぎると、小さな土びんに茶の葉を入れ、それを茶わんに注いで飲むのである。

スープ粥のつくり方は、こうである。まず水が三升ほどはある大きな鉄なべを、土のかまどの上にのせる。つぎによく洗った五、六びきの塩ざけと米を二升ほどなべに入れ、水を加えてぐずぐず煮る。しばらくして、塩ざけをもちあげて、ふりうごかすと、肉が骨から離れる。その骨を捨てて肉と米をまぜ合わせる。

どろどろになった粥を銅のひしゃくですくい、兵士の木の鉢にそそいでやると、かれらはそれを木のさじですくって食べる。

しかし、この食器は生臭いにはいがしみ込んでいて、むっとするようであった。塩ざけ入りの粥は、臭いのに弱ったが、それよりもほとほと閉口したのは堅いロシアのパンであった。

パンは粗末なくずもの大麦の粉に、麦のかすを発酵させてつくり、それに酸味をくわえて焼いたものである。このパンは堅いばかりか、麦の芒（のぎ）（実の殻にある針状の毛）がまじっていたから、まるで木ぎれをかじっているようであった。

兵營の食事が口にあわないことを役人に話し、なんとかして欲しいとたのむと、長官代理のメッテルは、漂流たちを当地の三人の商人たちの家に分宿させるよう手配してくれた。三軒の家の食事は上等であり、アメリカの料理に劣らないくらいであった。

やがて新任の長官ニコライ・ニカライウイチがこの町に着任したので、次郎吉らは大勢のひとつともに新任祝のあいさつにいった。次郎吉の仲間はどうぼうの家にわかれて止宿していたが、次郎吉だけは長官宅で世話になることになった。

長官の小間使にキンニヤという十八歳になる娘がいた。都から連れてきた、色っぽい美しさがある娘だった。長官は次郎吉に、あの娘をお前の嫁に迎えてやるから、じぶんといっしょにペテルスブルクに行かないか、と何度も勧めた。

天保十二年（一八四二）のロシア暦の六月上旬——オホーツクから二本マストの船（トランコースカ号とニコライ号）が二隻入港した。次郎吉ら五名は、このうちの一隻に乗りオホーツクをめざし、七月上旬に到着した。七左衛門は病いのため二十日ばかりおくられて、あとの便船で出帆した。

日本漂民を乗せた船が、オホーツク川にはいったとき、二十数名の土地の者が岸に出迎え、船を綱でひいてくれた。が、船はあやまって浅瀬に乗りあげてしまった。そのためあわてて積荷をおろした。次郎吉らは下船し、浜づたいにオホーツクの町まで歩いていった。

オホーツクの町は戸数二百ほどである。砲台も二カ所あり、大砲が五、六門ずつそなえてあった。次郎吉らは、町の長官宅を訪れると、ひじょうにねんごろないたわりの言葉をかけられ、その居館で世話になることになった。長官の名は、ニコライ・ウエコロシといい、一八一一年（文化八年）（文化八年）国後で幕吏に捕えられ、函館・松前に投獄され、一八一三年（文化十年）高田屋嘉兵衛と交換に釈放されたゴロヴニン（一七七六〜一八三二）の甥であった。

天保十三年（一八四二）七月中旬——漂民たちは、それまで親しくしてもらった土地の者に別れをつけると、オホーツクを出帆し、アラスカの港町シトカ（当時はロシア領）をめざし、五十日あまりの航海ののち、九月上旬シトカに着いた。ここはオホーツクよりもはるかに貿易の盛んな町であり、人家も密集していた。

漂民らはロシア・アメリカ会社支配人の別邸でくらすことになった。六人の漂民は、その一室に同居していたが、とくになんの用事もいっつけられず、毎日安楽にすごした。そればかりか、七日目ごとに酒までごちそうになった。

天保十四年（一八四三年）——イルクーツクから「漂民を日本へ送還せよ」といった司令がとどいた。都から来た司令は、日本人をエトロフ島（千島列島南部の島）に送りとどけよ、というものだが、この島は松前との連絡が不便であるから厚岸（北海道南東部）へ送るつもりだ、と長官はいった。出帆前、長官は次郎吉らを蒸気船（外輪船）に乗せ、近くの島に遊覧に連れだしてくれた。また長官宅に大勢の踊り子をよんで送別の宴を催してくれた。

かくして漂民らは、三月中旬シトカを出帆し、故国への帰途についた。送還に用いられた船は二本マストのプロミゼル号（船長・ガヴァリー）であった。約一ヵ月ほど航海したのち、邦暦の五月二十三日エトロフ島のフルベツに近づいた。このとき港には六、七隻の日本の船のすがたを見た。漂民たちはたいへんな喜びようであった。六人の者は、ロシア人とまちがわれないように、月代（まげ）をそり、麻縄でまげを結んだ。

フルベツの岸に近づいたとき、アイヌの小舟が近づいて来たので、じぶんたちは越中の放生津（ほうじょうず）の者であり、六年前奥州唐丹港を出帆したまま漂流し、いまロシアから送りがえされて来たところだといった。

その後、島に駐在する役人や商人、アイヌ人たちが船にやってきた。

松前藩の足軽……………小林朝五郎

松前藩の御用商人……………林右衛門

同商人の召使……………三吉、清蔵、又兵衛

アイヌ人……………三人

計八名。

島役人の朝五郎からたずねられて、漂流民たちは漂流以来の事情をくわしく語った。七月二十日ごろ、漂流民らはフルベツを出発すると、松前に護送され、九月六日ごろ当地に到着した。二十一日松前を出発し、閏九月十四日江戸に到着した。一行は小石川春日町の町宿・大黒屋長右衛門方にあずけられ⁽²⁰⁾、やがて幕府の長期にわたる取調べがはじまった。

十六日、幕府の勘定所に出頭した。十月十三日、七左衛門は帰郷のよろこびを待つことなく、江戸において病死した。

弘化元年（一八四四）から翌二年（一八四五）にかけて、年に一度勘定所に呼び出された。また次郎吉は、水戸藩邸や古賀謹一郎（一八一六〜八四、幕末、維新期の儒学者、洋学者）宅にたびたび招かれた。

弘化三年（一八四六）十月——一同、いったん帰郷を許されたが、翌年五月ふたたび江戸に呼びだされ、さらに一年以上も取調べがつづいた。

嘉永元年（一八四八）三月五日、八左衛門が江戸で病死した。嘉永二年（一八四九）五月九日、多三郎がなくなり、岩瀬赤田町二区の通称「西の宮の墓地」に葬られた。

一同放免となったのは嘉永元年九月四日であり、越中の郷里に帰ることができたのは同年十月一日のことである。富山を出帆して十一年後——エトロフ島に送還されてから六年目のことである。江戸における漂流民らの取調べは、外国で暮らした期間よりも長かったことになる。安政四年（一八五七）十二月十九日、六兵衛は放生津でなくなった。

長者丸の乗組員十名のうち、故郷の富山に帰ることができたのは、多三郎、六兵衛、次郎吉、金蔵の四名であった。

帰郷したこれら四名のその後の暮らしむきについては不明な点が多いが、生活は容易ではなかったようだ。かれらは「船稼ぎ」（生活のために

船に乗ること)を禁じられていたから、生活苦とたたかう必要があった。次郎吉のばあいは、塩の小売人をして渡世せざるをえなかった。

九 土佐・漁船(船名なし)の漂流

天保十二年正月五日(一八四一・一・二七)——土佐国の漁夫ら五名は、カツオ取りの船に乗り高岡郡宇佐浦興津崎の沖——足摺岬(土佐清水市南端)の沖合い十四、五里のところで漁をはじめたが、漁獲はさっぱりであった。

長さが四間一尺ほど(約七・六メートル)あるこの漁船に乗っていたのは——、

船頭	筆之丞	(のちの伝蔵、土佐国高岡郡宇佐浦の出身)	三十六歳
水主(水夫)	寅右衛門	(同右、出身)	二十六歳
	重助	(同右、出身)	二十五歳
	五右衛門	(同右、出身)	十四歳
炊(炊事係)	万次郎	(幡多郡中ノ浜の出身)	十四歳

など五名であった。このうち筆之丞、重助、五右衛門ら三人は兄弟であり、同じように宇佐浦の出身であった。万次郎だけは、他のものと郷里を異にし、中ノ浜の出身であった。

この時期、宇佐浦から出漁する漁船のいちばんのめあては、四国沖にやってくる「沖スズキ」であったが、延縄(一本の糸にたくさん釣針とえさがついている)を下ろして、獲物のかかるのを待っていたが、サバ数匹しかかからなかった。

六日(一・二八)……佐賀浦の沖十五里に移動したが、小魚十五、六匹釣っただけであった。

七日(一・二九)……足摺岬(土佐清水市南端)の沖合い十四、五里の地点に移動。小物(アジ・サバ・小鯛)のみが釣れた。

午前十時ごろから黒雲が天をおおい、西南西の風が吹きはじめた。他の漁船は、空模様が怪しくなってきたので、陸地のほうに引き返しはじめた。

やがて風もおさまり、暗雲も消え、海もおだやかになったので、ふたたび延縄漁にかかった。しかし、しばらくすると、北西の方向より烈風が吹きはじめたので、延縄の糸を切りすて、陸のほうに必死にろをこいだ。ろは四挺とも折れてしまった。波風ははげしく、船はろとかいを失ない風浪に翻弄され、ただ海のうえをただようしかなかった。

八日……………明け方に陸地と人家がみえた。船は室戸崎（高知県南東端）の沖をただよっていた。

九日……………西北の風が吹きはじめ、海はますます時化^{しげ}してきた。着物は波をかぶり、濡れたままであるので、寒気が身にこたえた。

十日（二・一）……………雨とみぞれが降りだした。わずかに残った米で粥をつくり、小魚を煮ておかずにした。

船はそのうちに酉戌^{うし}（西北）より卯辰^{うづ}（東南）に流れる潮流に乗ったと思ったら、飛ぶように走りだした。「黒瀬川」と呼ばれる黒潮に乗ったのである。

しかし、乗組員の体はびしょぬれであるため、体は凍え、手足の感覚もすっかり失なわれ、麻ひしていた。「十日 風雨益強ク 衣類各水^{そび}り 患難甚シ^{はなはだ}」（「土州漂流人書」）。

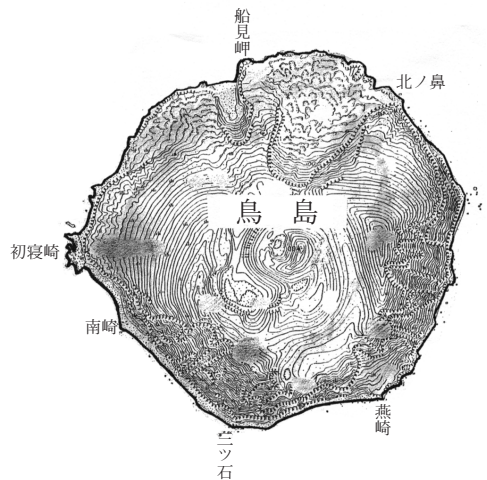
十一日、西北の強風が吹いた。出帆したとき、白米を二斗ほど積んでいたが、それも尽きようとしていた。翌十二日の暮方に、寅右衛門が東南の方向に島嶼^{とうしよ}を発見したので、一同大いに力をえ、板の小切れを櫓のかわりに用い、ようやく島の北側あたりに近づくことができた。が、岩石がびょうぶのように立っていて、人の接近を拒否しているようであった。やがて折れた櫓を縄でしばって島を一周し、ようやく平坦な岸をみついたので、そこからすこし離れた所に錨を投じ、船中に一夜を明かした。

一行が流れついて島は伊豆諸島最南端の火山島で、「鳥島^{とりしま}」という無人島であった。「嘉永五年子年 土佐人漂流記」は、この島のことを「藤九郎ト云島^{いづ}」と呼んでいる。いまこの島は「南鳥島^{みなとりしま}」と呼ばれている。島の位置は、

八丈島

青ヶ島

須美寿島



万次郎が漂着した“鳥島”

北緯三〇度二九分

東経一四〇度一九分

である。土佐の足摺岬からだすと、約七八〇キロほどに位置する。東京からだすと、南約六〇〇キロの地点にある。

島の大きさは、東西約二・七キロ、南北約二・四キロほどである。鳥島はほぼ円形をなしている。当時アメリカ人は、この島のことを「ハリケーン島」と呼んでいた。樹木はなく、生えているのは篠（細い竹）や茅（チガヤ、ススキの総称）だけであった。生き物としては、アホウドリ（信天翁）がたくさん生息していた。

風浪が荒いために浜に船を着けることが容易ではなく、何度も岩礁に船をぶつけるうちに破船してしまい、一同海の中に投げだされてしまった。が、十四日（二・五）の夕刻、かろうじて岸に上陸することができた。島に上陸してみたわかったことは、どうもこの島が無人島らしいことであっ

た。人家どころか人影すらない。食料になるものといえば、峨々たる岩のうえに生えているいたり、（茎は食用）であるが、採るには危険である。あとはぐみやかんじ、（かや）、雑草類が生い茂っているだけで、とても飢えをみたすものではなかった。水があるかどうか探してみたところ、岩のくぼみに溜りをみつけ、ついで島内をさまよい歩いているうちに天然の洞窟（高さ約二メートル七〇センチ、広さ約四メートル五〇センチほど）を見つけたので、ひとまずこの洞を住居とすることにした。五名の漂着者は、食料や飲水のない無人島に上陸できたのはよいが、かれらを待ちうけていたのは生きることとの闘いであった。そのため海苔の類や磯の岩につくかきを取って食べたり、水の引いたときは貝をとって食べた（中浜万次郎談「漂泊実話」）。

そのうちに磯に漂着した三斗入りの水桶を三つはこび入れ、それで岩からしたり落ちる水をたくわえて飲んだりした。が、それもなくなると、小便すら手に溜めて飲まねばならなかった。

やがて食物に窮するあまり、船木の折れたもので「藤九郎」を打ち殺し、その肉を塩水にひたして食べてみたが、生肉もしくは生乾きの肉であり、臭気もつよく、けっして味はよいものではなかった。ときに藤九郎がイワシや流れ着いたクジラの死骸をついばんで来たものを打ち殺したとき、それを口にするのもあった。

五人の漂着者は、食に事欠くあまり、ますますやせ衰え、脇腹の肋骨をはっきり数えられるほどになった。

四月になり、藤九郎が巣立つようになると、いよいよ食物に窮するようになり、磯辺に出て海苔の類を取ってたべるようになった。そのうちに重助が病みふせるようになると、筆之丞、五右衛門らの兄弟は看病した。

五月の三日か四日ごろ、五右衛門が洞窟の外にでて大海をみていたとき、辰巳（東南）の方角に、白い帆のようなものを発見したので、仲間を呼びおこした。それは大きな異国船であった。その船は、島から三里（二キロ）ほどの地点に達したとき停船した。

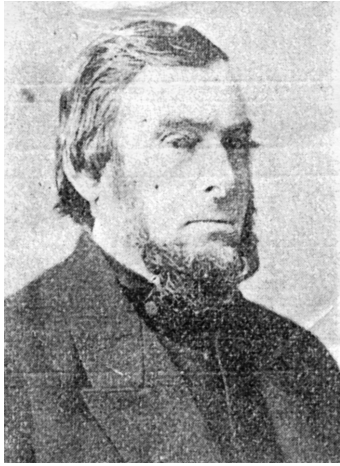
このとき帆桁の折れたものの先に、五右衛門の股引をくつつけて振ると、相手も気づいたものか、やがて

「隠元豆」

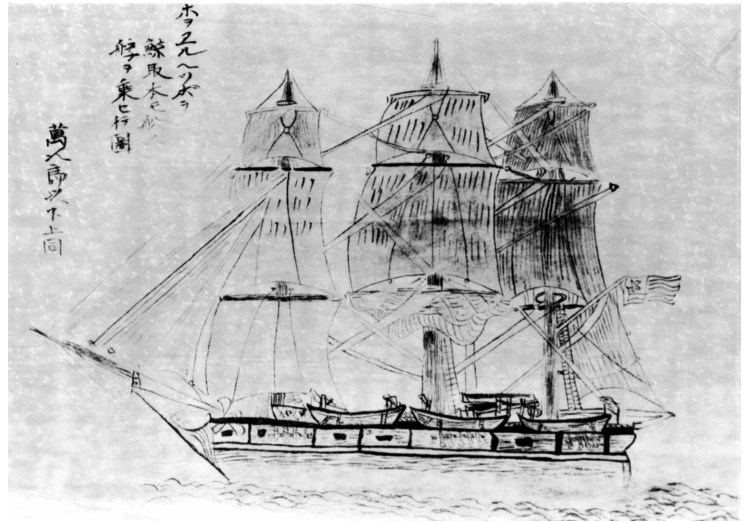
のような形をした二隻の小舟を下ろして、島のほうにやってきた。

それらの小舟（ボート）に乗っていたのは異国人六名であり、うち一人は黒人であった。

これらの小舟は、じつは食用にするためにウミガメを探しにきたものであった。が、たまたま困窮せる漂着者を発見し、救出したのである。異



ホイットフィールド船長



土佐漂流民を救助したジョン・ハウランド号

国人らは、五右衛門、虎右衛門、万次郎らを小舟に乗せると、本船めがけてこぎだしたので、まだ島に二人残っていると、身ぶりで示すと、島に引き返し、伝蔵と重助も救出してくれた。

伝蔵は白人に抱きかかえられ、重助は黒人に背負われ、ようやく浜辺に出ると、小舟の者が投げてよこしたロープを握りしめ、小舟まで引っぱってもらい、引き上げてもらった。

土佐の五名の漂流民を救ったのは、アメリカの三本マストの捕鯨船「ジョン・ハウランド号」(三七九トン、船長・ウィリアム・ヘンリー・ホイットフィールド)であった。この船は一八三九年(天保一〇年)マサチューセッツ州フェアヘイブンの港を出帆すると、南米のホーン岬をまわり太平洋に出て、捕鯨に従事した。

五人の漂流民は、ジョン・ハウランド号に上ると、少量の水とジャガイモのようなものを与えられ、ついで三センチ四方ほどの菓子(ビスケットか?)をあたえられた。一同、それらをむさぼるように食べた。飢えを満たすと、こんどは薬と筒袖つづきの服(洋服)をあたえられ、着替えるようにいわれた。

ジョン・ハウランド号は、五人を救出したのち、約四、五か月のあいだ洋上にクジラを追ひ、その間に十数頭ほど捕えた。

天保十二年十月八日(一八四一・一一・二〇)——同船は、マッコウクジラ油一四〇〇樽を積んで、ハワイ——オアフ島のホノルルに入港した。ある日のこと、ホイットフィールド船長は、五人の日本人をともない下船すると、実懇の間柄である医師兼宣教師のゲリット・パーメラ・ジャッド(一八〇三〜七三、ホノルルで没、オアフ墓地に墓碑がある)の住居へ連れて行った。

ジャッド師は、宣教師や医師としてのしごとのほかに、ハワイ政府の翻訳官・記録官と

なり、後年ハワイ政府の内務長官といった要職についたひとである。ローラ夫人とのあいだに一女あり、召使いを五人ほど雇っていた。かれは船長から遭難のてん末を聞くと、一同にむかって、手まねにより生国は手をあわせて拜む国か、とたずねると、漂流民らはみなうなずいた。

つぎに一朱銀、二朱銀、寛永通宝、キセル、などを見せ、これらを使っている国から来たのかとたずねると、みなそうだといわんばかりにうなずいた。念のためジャッド師は、ハワイ諸島と日本が出ている太平洋の地図をみせたが、漂流民はひとりとして日本の位置を指ししめすことができなかった。

こういった問答によって、ジャッド師と船長は、五人の漂流民が日本人であることを確信した。つぎに一行は、海に張りだすように位置している、「砦」^{フォート}（いまの「アーウィン公園」がある所）

に行き、そこに住むオアフ島知事マタイオ・クケアナオア（カメハメハ三世の女婿）に五人の漂流民を引き会わせた。

砦へ行ったのは、漂流民たちの上陸許可をとりつけるためと、帰国の手段を講ずるためであった。知事はホイットフィールド船長がかたる日本人漂流民の気の毒な境遇をきくと、一同に安心するようにいい、歓迎するともいった。かくして五人の漂流民は、知事のあずかりとなった。

五人は砦内に留めおかれることなく、すぐ下役カウカハワという者の厄介になり、客人として親切にあつかわれた。カウカハワの家（砦にちかいは、茅と草でふいた長さ六間（約一メートル）ほどの構えであり、そこに――

カウカハワ夫婦

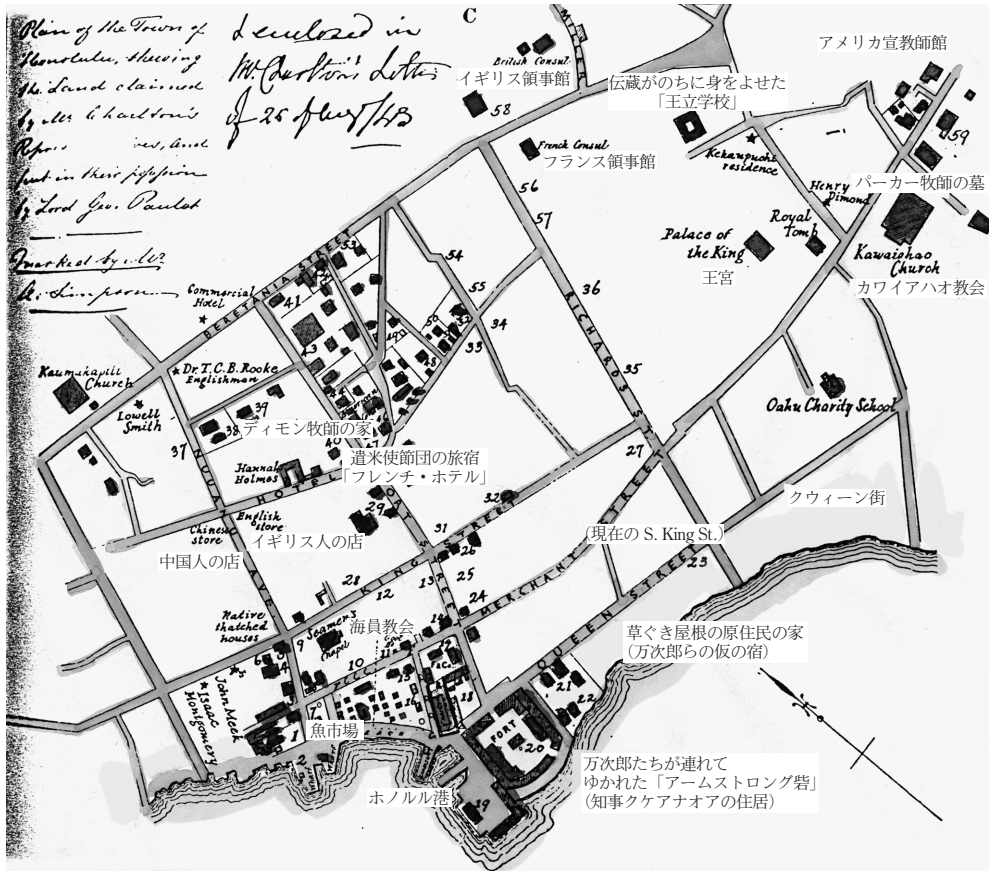
老母

弟（ヂョチヨ）夫婦と子ども

など、六人が住んでいた。

家といっても簡単な造りであり、ござの上にじゅうたんが敷いてあり、夜になると蚊帳をつつてその中で寝た。食物はタロイモを常食とし、麦は上食であった。住民の漁法は稚拙であり、磯魚や岩の底にいるエビなどを取って食べていた（「土佐萬次郎漂流記」）。

やがてホイットフィールド船長は、ホノルルより出帆するに先立ち、五人の漂流民に



1843年（天保14）8月にイギリス領事館が作成したホノルルの町の地図。

洋服の上下、各二着

五〇セント銀貨を五枚（二ドル五〇セント）

をあたえ、他の船員からも外套を一着ずつもらった。

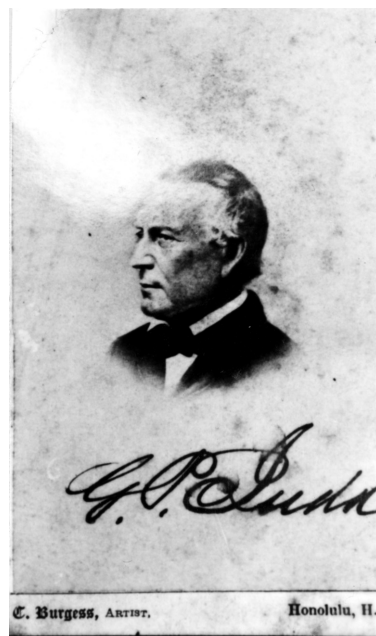
一日、船長は筆之丞に、万次郎をアメリカに伴い教育をうけさせたい、といい、また当人にもアメリカ行の意思を確認すると、同行することを承諾した。

かくして捕鯨船ジョン・ハウランド号は、一八四一年十二月二日（陽暦）ホノルルを出帆した（『ザ・ポリネージアン』紙の「海事ニュース」では、十二月一日）。

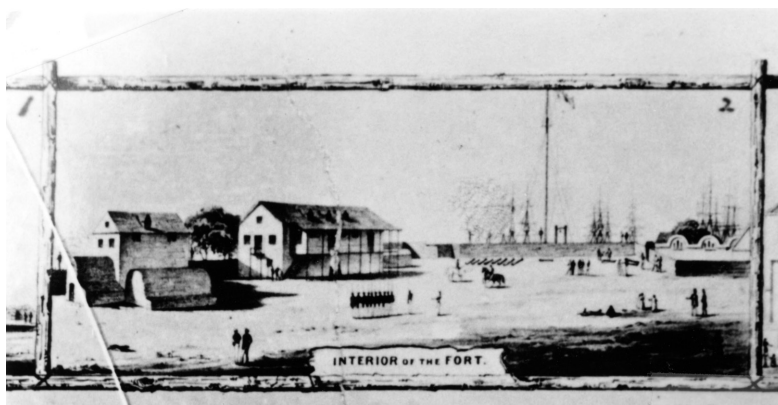
万次郎をホノルルの埠頭で見送った四人の漂流民は、その後も当地にとどまって帰国の機会をまった。かれらはカウカハワの家の厄介になっていたが、同家の水くみや炊事、子守りなどを手伝った。またときに原住民の小船にのり、沖合い四、五里のところに出かけ、小イワシの生き餌をつけ、カツオの一本釣りを試みたり、釣りあげたその他の魚を市場に持って行って売り、多少の利益をえた。またカウカハワの親戚の者が、ホノルルから三里あまりのところに住んで農業をやっていたので、ときどき野良しごこの手助いなどをした。



ジャッド師の墓（オアフ墓地）筆者撮影



ゲリット・パーメレ・ジャッド博士



砦の図



現在の砦跡（アーウィン公園）

ホノルルの暮らしが一年あまりになると、土地のことばもすこしはわかるようになった。かれらは人の世話になって暮らすより、人の雇いとなって独立の生活を営むことを考えるようになった。知事に会い、希望の趣をつたえると、許可が出たので、めいめい独立して暮らすことになった。

四人ちゅうの最年長者は、筆之丞であった。かれはアメリカ人から重きをおかれ、なにかにつけ相談をかけられることが多かった。その名を呼ぶのに、

「フデノジョウ」

をいつも訛って、

「デンジョウ」

と発音した。かれらにとって「フデノジョウ」と正しく発音することは容易ではないのである。

そこで筆之丞は、故郷の叔父に「伝蔵」という者がいることを思い出し、それより伝蔵と改名するにいたった（中浜東一郎『中浜萬次郎伝』富山房、昭和11・4）。

カウカハワの家を出てからの四人の寄寓先は、左記のようになる。

筆之丞（伝蔵）……「ロイヤル・カステル王立学校」の守衛兼用務員。

寅右衛門……大工ハートの徒弟。

重助……

五右衛門……

宣教師ゲリット・パーメラ・ジャッド宅の下男。

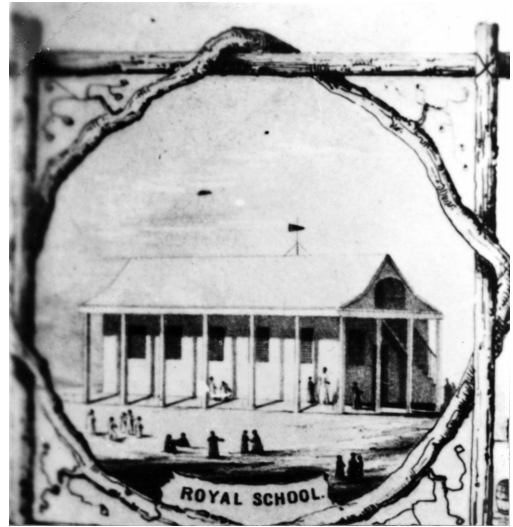
筆之丞は、エイモス・スター・クックス夫妻が勤める「王立学校」に門番兼雑用人



伝藏



伝藏の弟・五右衛門



「王立学校」の図

となり、寅右衛門はホノルルの大工の親方の見習いになり、重助と五右衛門はジャックド師宅に雇われ、水くみや薪割りのしごとをした。

重助はかって鳥島に上陸したとき、足をいたため、その負傷が治ゆせず、やがて足を引きずって歩くようになった。ジャックド師はかれを診察して薬などをあたえたが、いっこうによくなるないので、ホノルルから十数キロ離れたクーラウの医師にみせることにした。

重助は兄の伝藏、弟の五右衛門などに付き添われ、クーラウに着くと、土地の人ブーポンの家にやっかいになった。重助は地元の医師、クーラウにちかいカネオエ(Canoeh)に住むベンジャミン・W・パーカー牧師(二八〇三〜七七、マサチューセッツ州レディングに生まれ、ホノルルで死没)の治療をうけたが、

「癩^{しやくけ}気の由^{よし}にて終^{つい}に病死」するにいたった(「漂流万次郎帰朝談」)。癩^{しやくけ}とは胸や腹

二十七歳
萬治郎



万次郎

に激痛をおこす病気の意である。

重助が亡くなったのは一八四六年一月である。享年二十八歳であった。その亡骸は、カネオエにあるパーカー牧師の「パレカ教会」（当時は木造平屋造り）の墓地に葬られた。墓石は六角形で、「ハラベルチャン コンチョコパ」（意味不明）の横文字が彫ってあったようである。墓石については、「参考譚客伝」に絵師・河田小龍が描いた「重助墓図」がある。いまこの墓地は現存しない。

その後、伝蔵と五右衛門らは、そのままカネオエにとどまった。伝蔵は重助の墓から数百メートル離れたところの浜辺にちかい所に小屋を立ててくらし、五右衛門はパーカー牧師の教会内に居住した。のちに兩人

は、政府より若干の土地をあたえられ、漁労のかたわら、耕作に従事した。

一方、ホノルルで四人の仲間と別れた万次郎は、ジョン・ハウランド号とともに捕鯨に従事し、グアム島、台湾近海、東シナ海、タヒチ島、フイリピン諸島などを巡航し、一八四三年五月七日（天保十四年四月八日）マサチュセッツ州ニューベッドフォードに到着した。かれはホイットフィールド船長の世話で「ポイント・スクール」（一八二八年創設の小学校）で初等教育をうけ、翌一八四四年私立学校「パーレット・アカデミー」（中等学校）に転じ、数学・航海術・測量術などをまなんだ。

一八四六年五月十六日（弘化三年四月二十一日）、万次郎は、ニューベッドフォードの捕鯨船フランクリン号（二七三トン、船長アイアン・デヴィス、乗組員二十八名）に乗ると、ふたたび海に出た。同船はボストン港に寄ったのち、ポルトガル領アゾレス群島のひとつファイアル島（火山島）に寄港し、喜望峰をまわりインド洋に入り、ティモール島、ニューアイルランド島（パプアニューギニアの島）、グアム島のアブラ港、ボニン群島（小笠原諸島）の父島、琉球諸島のうちの一島、鳥島（ハリケーン島）、日本の東北地方の沖などにクジラを追いつつ巡航し、一八四七年十月十七日（弘化四年九月九日）ホノルルに入港した。

ホノルルに約七年ぶりで上陸した万次郎（このころジョン・マンと称していた、齢ははたち）が、いちばん先にしたことは、むかしの仲間――

重助、五右衛門、伝蔵、寅右衛門らの消息をえ、再会をはたすことであった。早速、港に日本人がひとりいる、と教えてくれる者があり、はやる心を押えながら会いにゆくと、それは大工の徒弟になっている寅右衛門であった。

寅右衛門は、この年三十歳。突然の仲間の訪問におどろき、しばらく口もきけぬほどであった。万次郎は寅右衛門が語るはなしに、じょじょに仲間の消息がわかってきた。昨年（一八四六年）一月に重助が病死したこと。伝蔵と五右衛門が、ことしの四月二十六日（弘化四年三月十二日）捕鯨船フロリダ号に乗り、故国日本へむかったといった話を聞いた。

（兩人は、ホノルル出帆後、ニューギニアからオーストラリアにいたる洋上にクジラを追い、その後オホーツク、カムチャッカ半島やアリューシャン列島の沖を航したのち、一八四八年十一月十一日（嘉永元年十月十六日）ホノルルに帰港した。伝蔵と五右衛門は、けっきょく帰国を果たさず、別の好機を待つことにした。）

万次郎は、二度目のホノルル訪問において、「海員礼拝所」と『フレンド』紙（一八四三年創刊）を主宰するサミュエル・チーネリ・ディモン牧師と知りあいになった。のちに万次郎と伝蔵と五右衛門は、このディモン牧師の世話により、十年ぶりで帰国を果たすのである。

万次郎がこのときホノルルに滞在したのは一ヵ月ほどであるが、一八四七年（弘化四）十二月上旬——ふたたびフランクリン号に乗ると、同港を出帆した。その後、船はギルバート諸島、グアム島、フィリピン近海、日本列島沿いの太平洋、ジャワ島北西岸、チモール島、モーリシヤス島セントレナ島の沖にクジラを追い、一八四九年九月二十三日（嘉永二年八月七日）——約三年四ヵ月ぶりで、ニューベッドフォードに帰着した。この間に捕ったクジラは約五〇〇頭、鯨油は数千たる、万次郎は三五〇ドルの配当金をえることができた。

折からアメリカ本国では、カリフォルニアにおいて砂金が発見されたことにより、「ゴールドラッシュ」（一かく千金への狂奔）がおこり、東部人はシエラネヴァダ山脈を流れるサクラメント川の支流アメリカ川の河原に押し寄せるようになった。

万次郎も黄金熱にあたり、この機会に一かせぎし、その金を帰国の旅費にあてようとした。かれは旧知のウィリアム・テリーと毎日河原に出て、選鉱鍋で砂金を採った結果、二ヵ月ほどたつと六〇〇ドルちかくかせぐことができた。一八五〇年九月上旬——万次郎は採掘道具のすべてを友人のテリーにあたえると、サクラメントを経てサンフランシスコにもどり、十日ほどこの新興の町ですごしたのち、商船エライシャ・ウォーリック号に乗り、オアフ島にむかった。

万次郎が三たびホノルルに入港したのは、一八五〇年十月十日（嘉永三年九月五日）のことである。ひさびさにホノルルの街中を歩いてみると、

町の様相は一変し、街路も建物もおどろくほど立派になり、商店も七十五軒にふくれていた。ハート家に身をよせ、大工しごとをしている寅右衛門を訪ねた。

同人の話によると、伝蔵と五右衛門はいまホノルルにいないという。この二人は、ハナウリウリ（真珠湾のむこう側）でくらしているという。そこで早速、使いの者を出し、兩人を呼びよせることにした。万次郎は、三人に手にした金のこと、胸に秘めていた帰国計画について語ると、ひとり寅右衛門をのぞき、あとの二人は計画に賛同してくれた。

万次郎の計画では、日本の最南端——琉球国に上陸を敢行するつもりであった。そのためにいろいろな品を用意せねばならなかった。まず三人の身分証明書（旅券）が、デイモン牧師の世話により、ホノルル駐在のアメリカ領事の手で発行され、ついで町の慈善家らもいろいろな物品を寄贈してくれた。

万次郎は、まず上陸用の小舟（捕鯨用の両端がとがったボート）を二二〇ドルだして購入し、舳先に *Adventure*（「冒険号」）と、ペンキで船名を書き入れた。ついで用意したのは、航海や生活に必要なつぎの品々である。

鉄砲一挺	ピストル一挺
鍋類 <small>なべ</small>	斧 <small>おの</small>
大工道具	釣り糸と鉛製のおもり
缶詰	水たる
針と糸	はさみ
ボタン	石けん
薬	コーヒー
白砂糖	タバコ
マッチ	小刀
タオル	剃刀道具 <small>かみそり</small>

紙
インクとペン
衣類
ガラス板
ペンキと刷毛
地図
航海用時計
コンパス（羅針盤）

また万次郎は、私物としてつぎの品々を日本に持ち帰った。

航海用の機械器具類

洋書十七冊

砂金とアメリカのコイン

銃剣付鉄砲一挺

ピストル（二挺）と弾薬

異国のサイコロ

〔難船人帰朝記事〕

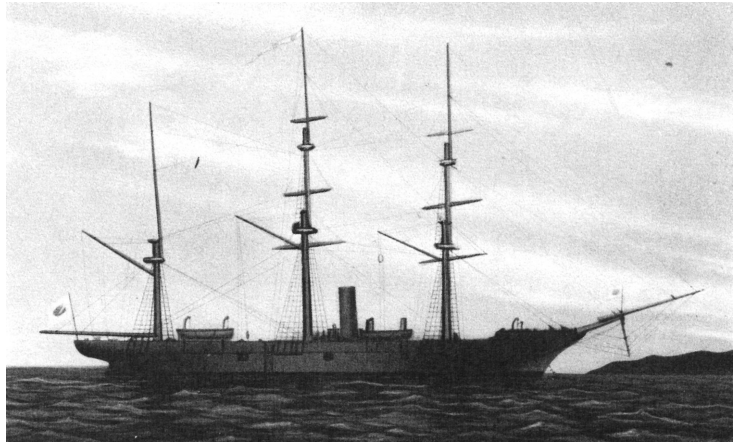
つぎに帰国の便船——三人を琉球国の沿岸まではこんでくれる船を捜さねばならぬが、上海へむかう途中ホノルルに寄港したアラバマ州の商船セアラ・ボイド号が見つかり、船長ジェイコブ・D・ホイットモアにたのんで便乗させることに成功した。

万次郎ら三人の日本人をのせたセアラ・ボイド号は、一八五〇年十二月十七日（嘉永三年十一月十四日）ホノルルを出帆した。船は出港後、サモア諸島のちかくまで南下をつづけ、それより西北に転じ、一ヵ月ほど走ると琉球列島に近づいた。

一八五一年二月二日（嘉永四年正月二日）——万次郎らの捕鯨用ボートが下ろされ、三人は乗組員たちに別れをつけると、帆を張って陸地を目ざした。翌日、三人は琉球の東南端——摩文仁間切の小渡浜（現・糸満市大渡）の海岸に上陸した。

その後、三人は那覇（摩文仁より二十四キロ）に護送され、ついで薩摩の鹿児島、長崎を経て、土佐国に送られ、嘉永五年十一月五日（一八五二・一一・一五）国をはなれて十一年十ヵ月ぶりに故郷に帰った。

ことに万次郎がホノルルを四度目に訪れるのは、咸臨丸の通弁方としてサンフランシスコからの帰路、寄港したときである。遣米使節（正使・



幕艦・咸臨丸の図。

外国奉行新見正興まさむね、副使・村垣範正のりまさ、小栗忠順ただまさに、万一病気などの事故があったとき、代わりの使節役をつとめるために、幕閣の要人らは軍艦奉行・木村撰津守喜毅よしむね（芥舟）を、使節団の迎船ボーハタン号よりも一足早く横浜を出帆させた。

もとより日本人は、船をあやつって太平洋を横断するといった大航海を経験したことはなく、はなはだ自信に乏しかった。提督木村喜毅は、日本の東沿岸を測量ちゅうに浦賀沖で台風のために難波し、船長ジョン・M・ブルック以下乗組員十名が横浜に滞在していることを知り、同人とその部下を案内人とすることを思いつき、ハリス米公使の世話で咸臨丸に乗り込ませた。

日本政府（幕府）は、横浜の町にちかい海岸に吹き寄せられたこのスクーナーの士官と乗組員にたいして、横浜の街中に快適な宿所をあたえ、厚くもてなした。ブルック艦長（海軍大尉）は、それを恩に感じていた。

一八六〇年一月十六日——咸臨丸に乗った遣米使節らは、江戸から横浜にやって来た。かれらは迎艦ボーハタン号で一時間ほどすごしたのち、太平洋を航する日本の司令官（木村撰津守）を助けるために、ブルック大尉に咸臨丸カンテイマルでサンフランシスコへむかうよう命じて欲しいといった。

日本の士官は、遠洋航海の経験は皆無であり、冬期、洋上でいったん嵐に遭うと、きびしい試練と直面することは必定であった。ブルック大尉は、米艦隊の司令官タットヌルより咸臨丸への移乗を命じられた（ジェームズ・D・ジョンストン海軍大尉著『中国と日本』一八六一年）。

安政七年正月十三日（一八六〇・二・四）横浜を出帆した咸臨丸は、三十六日間の航海を経て、同年二月二十六日（三・一八）サンフランシスコ港内に投錨した。閏三月十九日（一八六〇・四・九）、同艦は帰国の途につき、サンフランシスコを出帆して十五日目の四月四日（五・二四）オアフ島のホノルルに入港した。そして同月七日に早々に出帆すると、日本へむかった。

咸臨丸がホノルルに停泊したのは、わずか三日間である。この間、万次郎はひまをえると、旧知との再会をたのしんだ。とりわけ帰国のとき、たいへん世話になったディモン牧師と会い、帰郷までのいきさつや日本事情について手短かに語った。



ジョン・M・ブルック海軍大尉の肖像。

オアフ島に残る日本漂流民の記録。

ホノルルの「ハワイステートアーカイブス州立公文書館」に「帰化記録簿」（一八四六年〜一八七四年、A〜L巻）があり、そのC巻の上巻に二人、さらにその下巻に一人、「日本生まれ」といった記述がみられる。
すなわち――

〔氏名〕〔帰化を宣誓した日〕

- (一) Kuke, Kainoa (クケ、カインオア) ……一八四四・一〇・二五 (天保十五年九月十三日)
- (二) Kueno-no (クエモノ) ……一八四五・一・一〇 (弘化元年十二月三日)
- (三) Kolaimo (コライモ) ……一八四七・二・一三 (弘化三年十二月二十八日)

「帰化記録簿」は、ハワイに帰化した外国人の宣誓書のファイルである。各ページの左側にハワイ語、右側にその英訳の宣誓文が印刷されている。上段の印刷文と下段の印刷文のあいだに、宣誓者の生国と以前の居住地、署名欄がある。

(一)の上欄外記に、インキで、

Kanoka Nipona-Kuke, Kainoa

とハワイ語で記されている。この文は役人が書き入れたものであろう。この一文の意味は、「日本の住人クケ、カインオア」である。宣誓者の署名らしきものが見られるが、判読できないものである。

(二)の上欄外記に、インキで、

Kueno-no Japona Japanese

と、ハワイ語と英語で記されている。この一文の意味は、「日本のクエモノ 日本人」である。

(三)の上欄外記には、なにも記されていない。いま述べた三通の帰化宣誓書に、「はっきり『Tosanokuni』(土佐国)の語が記されているのは(二)である。

一八四四年(天保十五年)から一八四七年(弘化三年)までの間、オアフ島に、居住していた日本人といえば、――

重助 (一八四六年一月――オアフ島クラウで病死)

五右衛門 (オアフ島のカネオエ、のちにハナウリウリに在住)

寅右衛門 (オアフ島のホノルル在住)

筆之丞 (のちの伝蔵、オアフ島のカネオエ在住)

ら四人である。わたしは上記三名の名前を、語音類似などからつぎのように推定した。

Kuke, Kainoa (クケ、カインオア) ……重助(二十八歳)

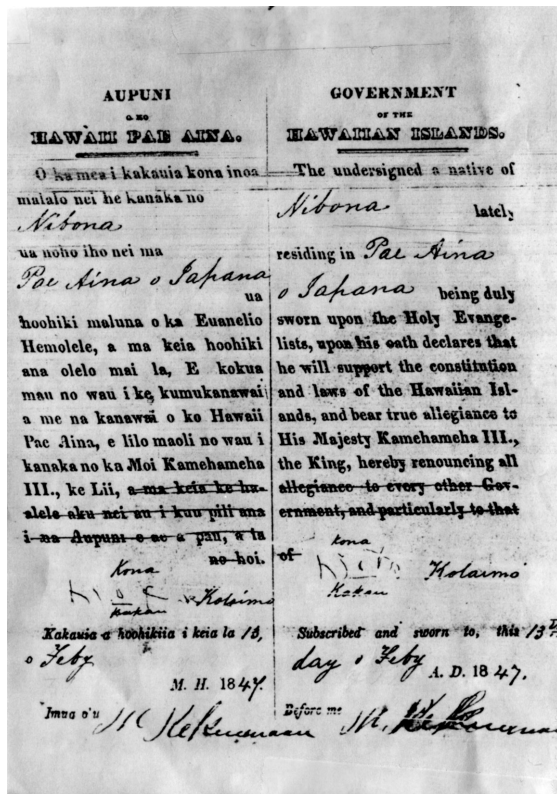
Kuemo-no (クエモノ) ……五右衛門(二十歳)

Koaino (コライモ) ……寅右衛門(三十一歳)

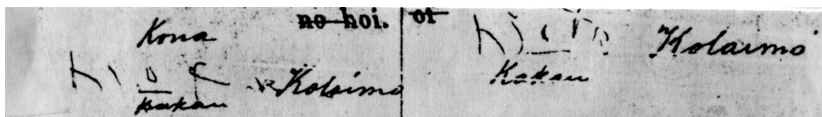
もしこの推測があたっているとしたら、いちばん早く帰化の手続をとったのは、病身の重助である。ついで五右衛門、寅右衛門らがあとにつづいたことになる。筆之丞(伝蔵)だけは、帰化しなかった。

これら三名のうち、役人のまえで「先ごろまで日本の島の住民であった」(a native of ^{ニホナ} Nihona lately residing in Pae Aina o Japan)と語ったと考えられるのは、コライモ「寅右衛門」(大工の従弟)であった。かれはハワイ諸島の憲法と法律を遵守し、国王カメハメハ三世にたいして忠誠を誓うことを誓言した。

以上三名が帰化の手続をとったうらには、世話になった牧師らの助言もあったことであろう。寅右衛門が万次郎の帰国計画を耳にしたとき、帰



寅右衛門のハワイ帰化証書



寅右衛門 (Kolaimo) の署名

国することをためらったのは、ハワイに帰化したことが足かせになっていたからであろう。

オアフ島でくらしした重吉、五右衛門、寅右衛門、筆之丞（伝蔵）のうち、現地人と妻帯したのは五右衛門だけである。

同人の妻については、紀州日高（和歌山県中部）の漂流民・菊次郎（天寿丸の元乗組員。嘉永三年〔一八五〇〕伊豆下田沖で遭難、同年三月十一日〔一八五〇・四・二二〕ニューベッドフォードの捕鯨船ヘンリー・ニールランド号に救出され、ホノルルにやって来た）の証言がある。菊次郎は一日、ハナウリウリにある五右衛門宅を訪れ、同人と伝蔵らに帰国の相談をしたとき、そばに五右衛門の女房がいた。

その女性は、年のころは十七、八歳。身のこなしはよく、日本語が理解できずただ笑顔をみせ、夫らの話を聞いているようだった。（『通航一覽』続輯）。

五右衛門は、ハワイに帰化した身であったが、万次郎らとセアラ・ボイド号でホノルルをあとにしたとき、婚儀の重きを知らず、置き手紙をしただけで乗船した。かれは琉球において薩摩の役人の尋問をうけたとき、悔恨の念に責められ、大声で泣いたという。「此女ノコトヲ云ハハ、声ヲアゲテ鳴キタリト」（薩藩取調記録）。

この女性のその後の消息を聞かぬが、五右衛門はオアフ島に残してきた妻の行く末を案じたことであろう。

十 撰津（現・大阪の北部と兵庫県東部）・（永住） 栄寿丸

天保十二年（一八四二）秋のこと——（せつしゅう） 撰州兵庫・中村屋伊兵衛の持船「（永住丸） 栄寿丸」（千石積み）には、左記の十三名が乗りこんでいた。

沖船頭	善助（二十一歳）	紀州熊野周佐美浦	帰国
岡廻り	初太郎（十九歳）	阿波	帰国
（事務会計を担当）			

七太郎（初太郎の兄）	伊予興居島	帰国
<small>（多）</small> 伊之助（三十九歳）	能登	
<small>（多）</small> 利三郎（三十五歳位）	伊豆・八丈島	
万蔵（三十一歳）	奥州南部	
要蔵（三十歳ぐらい）	同右	
<small>（三平）</small> 三兵衛（二十歳ぐらい）	播州明石東垂水	
<small>（岩松）</small> 岩兵衛（二十七歳ぐらい）	能登	
<small>（助）</small> 官次郎（二十五歳ぐらい）	能登	
惣助（四十歳ぐらい）	九州・島原	帰国
<small>（多吉）</small> 多吉	紀州熊野周佐美浦	
<small>（弥一）</small> 弥一郎（四十二歳）		

注・この氏名一覧表は、河野太郎編著『初太郎漂流記』（徳島県教育会出版部、昭和45・10）、「亜墨新話」（石井民司編『漂流奇談全集』所収、博文館、明治33・7）、「栄寿丸漂流口書」（荒井秀俊編『異国漂流記集』所収、気象研究所、昭和37・7）などを参照にしてつくったもの。

同船は酒・砂糖・塩・線香・大豆・繰り綿（精製していない綿）などを積んで、天保十二年八月二十三日（一八四一・一〇・七）兵庫を出帆し、

九月十八日相模国浦賀に到着し、ここで役所（浦賀御番所）の改めをうけたのち、船問屋・飯塚惣太郎方に大豆七十俵をわたした。

翌十九日の明け方、奥州南部をめざして出帆した。房総の沖をとおり、十月十二日の夕方、犬吠崎の沖にさしかかったとき、北西の強風が吹くようになり、高波にほんろうされるようになったので、帆をおろして様子をうかがった。しかし、風浪はますます激しくなり、積荷をすこし海に投げすてた。翌十三日になっても風浪はおさまらず、さらに積荷をすてた。

帆柱を切るべきか御くじをひいたところ、切るべしとの神意が出たので、櫓（船の高い所）のうえにのぼりこれを切った。

十一月七、八日になっても、風浪はいっこうにおさまらず、船は吹き流されつづけた。船には米が三俵ばかり残っていたので、一日米一升をかゆにして十三人で分けあって食べた。しかし、このころになるとすでに飯料も尽きはててきた。米を食いつくしたとき、積み込んでいる砂糖や酒をすこしずつ口に入れるようになった。

方位について考えてみると、東南東のほうに流されているようにおもえた。翌天保十三年春、船は相かわらず茫々たる海を流されつづけていた。見えるものは、雲と浪だけである。海のおだやかなとき、帆をぬうときに用いる針を曲げ、それに疑似餌をつけてカツオなどを釣って食用とした。暖かなある日のこと、櫓のうえに登って、四方をながめていると、西の方角に船をみかけた。帆の数が多いことから、それは異国の船であることに間違いなかった。その船はだんだん漂流船のほうに近づくくと、ボートを二隻おろし、うち一隻が近づいてきた。漂民らは畏怖して船内にいると、何人かが乗り移ってきた。かれらは日本人が飢渴のため、体が弱っていると察して、身ぶりにより、本船に移るよういった。

船中には、まだ酒が四十たる、砂糖が十七たる残っていたが、それらはすべて異国船に積み込まれ、また漂民らは衣類や手道具などを取りかたずけると、船を棄てて、異国船に乗り移った。時に天保十三年二月二十日ごろのことである。このときはどこの国の船かわからなかったが、あとで聞いたところによると、スペイン船（じつは密貿易船）であった。船は二本マストを備え、長さは約十三間（およそ二十数メートル）ほどあった。乗組員は、二十八名。船長はスペイン人であり、目も髪の色も、日本人とおなじように黒かった。その後、異国船は六十日ほど東にむかって進んだ。漂民らははじめの二、三日、日に三度食事をあたえられたが、やがて日に二食となった。飲料水も乏しく、ろくに与えてくれず、のどかわきは漂流していたときよりも苦しかった。おまけに塩気のあるものを食べさせてくれないから、気力はおとろえ、元気がでない。ときに目まいがして倒れるようなこともあった。

船長は、漂民をふた組にわけ、昼夜を問わず二時間交替で船首と船尾の雑用（ロープ引きや、掃除）に使った。すこしでもしごことを怠ると、口

ープをふりまわし、どなりつけた。ときに帆柱のうえのしごとを命じられたが、日本ではそのようなしごとをしたことがないから容赦してくれ、と身振りであつた。すると、相手はわかっていたのか、許してくれた。異国船に乗り移って五十日ほどして、一同まげを切り海に流した。

天保十三年四月中旬のある日のこと——船は昼ハツ（午後二時ごろ）陸地から数百メートル沖合に投錨した。浜辺の後背地は丘陵であった。乗組員たちは、買物のために上陸しているようであった。また陸地のほうからも人が来て、船員らと話をしていた。

夜六時ごろ、

善助	初太郎	弥一郎
多吉	利三郎	伊之助
惣助		

ら七名は、ボートに乗り、上陸するようにいわれた（「あめりかしんわ亞墨新話」）。

夜のことであり、また土地不案内の異国のことでもあったから、再度拒否すると、船員は大いに怒り、善助をなぐりつけ催促した。一同、しかたがないと思つて、いられるとおりボートに乗り移ると、浜辺にこぎつけた。

ボートの外国人五名は、善助ら七名を陸地に置き去りにすると、本船にもどつた。程なく、船は錨を巻きあげると、いずこえか出帆した。異国船に乗り移つてから、この日までの日数は、およそ五十五日であった。

異国船に取りのこされたのは、

官次郎 <small>(助)</small>	岩兵衛 <small>(岩松)</small>	三兵衛 <small>(三平)</small>
要蔵	万蔵	七太郎

ら六名である（「栄寿丸漂流口書」）。

七名の漂流民らは、上陸後、しばらく茫然としてなすすべがなかった。善助や初太郎は、ひるま陸のほうに白壁の家をみたので、その家をたずね、身の上のことをたのんでみよう、という、五人のものは、異国船の者は、これまでわれわれを慈悲もなく、こき使ったのだから、陸の人間も邪険の心をもっているに違いない、といった。その証拠に、昼間乗組員と陸のものが何やら話していたではないかといった。

しかし、知らぬ土地に捨てられ、衣食の縁ともはなれば、いずれ死ぬ身である。そこで一か八か慈悲をもとめてみるのも一計とばかり、善助と初太郎が丘の家をたずねることにした。

両人は小道を四丁ほど行くと、人家が二軒あるところに至った。その家の屋根は、しゅろ（ヤシ科の常緑高木）の葉のようなものでふき、間口は四間ほどであった。家のまわりは土壁であった。入口あたりに獣の番人のような男が横に寝ていたので、呼びおこすと、相手はびっくりしたようであった。

ことばは通じないので、手まねによって漂流の艱苦かんくのありさまをつたえ、助けられるようにいうと、相手もわかったのか、すぐ真水を飲ませてくれた。相手の男は、どこの国の者かとたずねているようなので、「日本ハボン、日本ハボン」と何度かいうと、その意が通じたのか、「ハボン」「ハボン」といった。

両人はまた手まねにより、浜辺にまだ仲間が五人いる、という、はじめに会った獣の番人といっしょに、呼びに行った。やがて七人の漂流民は、異国人の家にもどると、そのあたりにある大きな樹木の根元に牛の皮を二枚しいて寝た。

気候は日本の七月ごろのそれと変わらず、暑気は強かったが、蚊はいたって少なかった。

翌朝、二軒の家から男女残らず出てきて日本人を見物したのち、女性らは七人の者を各家に招き入れると、ひとりひとりにコーヒーを入れてくれた。やがて萱かやのようなもので日おいがつくられると、その下に牛の皮を敷き、その上に食事をならべた。出された食物は、トウモロコシでつくったもちのようなものと、鶏やブタや牛肉の塩漬け、牛乳などであった。

二軒の家の住民は、二十名ほどであり、髪や眼は、日本人とおなじように黒い色をしていた。かれらは、ブタや牛、羊などを飼って生活しているようであった。七名の漂流民は、ここに二日世話になった。かれらが置きざりにされた所は、メキシコ領カリフォルニア南部のサン・ルカス岬であった。

三日目になると、一本マストの二百石積の帆船がやって来て、獣肉やブタの油のたるを積み入れた。漂流民七名もその船に乗るよういわれたの



メキシコの地図

で直ちに乗船すると、船はすぐに出帆し、東にむかった。

二日ほど東にむかって走り、四ッ（午前十時）ごろ、山の連なった浜辺に到着した。やがて一同は上陸すると、二軒の家の主人ていの者がどこかに行ったと思ったら、鞍のついた馬を十二、三疋ほど引きつれて戻ってきた。七人の漂流民は、その馬に乗り、十七、八町ほど行くと、人家が七、八十軒ほどもある町に着いた。そこはカリフォルニア西部の町サン・ホセ（サンタタクララの谷に位置）というところであった。

突当りの役所のようなところに行き、馬をおりて中に入って会釈をすると、役人のような者が三人いた。そのそばに以前スペイン船に残された六名のうち——七太郎と万蔵がいたので、一同びっくりした。兩人の話によると、例のスペイン船は、水を補給するためにこの浜に寄ったとき、二人を置き去りにして、いずことなく出帆したという。昨日からこの町に来て世話になって

いと語った。

お互い別れてからのようすや、船中に残る四人のことなどについて話していると、町の住民が二十人ほどやってきて、九人の漂流者を一人ずつ連れ帰った。初太郎は、五十歳ほどの人品のよい人の家に連れてゆかれた。そこは萱ぶきの白壁の家で、男女十人ほどが暮らしていた。下女は二人。下男は一人いた。

人間も衣服も食事も、はじめてやかいかいになった二軒の家のものと変らなかつた。朝はコーヒーに砂糖を入れてのむ。パンや米のほか、鶏や魚、獣肉などを油であげて食べた。はしを用いず、小刀やくま手のような形をしたものを使って食べた。

当地は暑気はげしく、砂地は焼けるようであつた。そのせいか男女の靴の底は厚くなつてゐた。しかし、夜になると涼風が南のほうから吹いてきたのでしのぎよかつた。

九人の者は、サン・ホセで暮らすようになると、頭髪も衣服も土地のものと同じにした。漂流民らは、朝は山に入って薪を採つたり、水を汲んだり、庭のそうじをしたり、また田畠をたがやすしごとを手伝つた。またひまなとき、九人の漂流民は一カ所にあつまると、故郷のことなどを話した。つた。

初太郎がやかいかいになった家の構成は、つぎのようであつた。

主人……名はミグエル・チョウサー。

妻……名はイナシヨ。

長男……名はブラス。

次男……名はアゴステン。

長女……名はアントウニャ。

次女……名はセンシヨ。

三女……名はヘソス。

家の主は初太郎をかわいがり、服を新調して着せてやつた。その服を着て、町に出かけたとき仲間からうらやましがられた。善助を連れ帰つた

者は、男やもめであり、慈悲のあるひとであったが、初太郎ほどは愛さなかった。ともあれ、初太郎と善助だけは、家の諸用などにいっさい使わ
れず、安楽にくらした。

ミグエルは、じぶんの娘と初太郎を妻めあわせるつもりであった。長女アントウニャと初太郎を呼びよせると、婚姻の式はこのようにやるものだとい
うことをおしえた。また時々、初太郎を狩猟につれだし、鉄砲でウサギを撃つ方法をおしえた。またスペイン語をおしえてやろうといったが、初
太郎は外国のことを覚えてもしかたがない、とおもい、気が進まなかった。が、ことばを覚えてたら、本国に送り帰してやろう、といわれたので、
しかたなく少しずつ習い覚えた。

さてサン・ホセに来て一ヵ月ほどすると、善助の家主が郷里のラ・パス（南カリフォルニア、メキシコの北西に位置）へ帰るといっているので、善助
をつれて出発した。さらに四、五十日ほどすると、惣助・伊之助・利三郎らの家主らも、他所に出かせぎに行くことになり、これら三名の漂流民を
ともなって出発した。サン・ホセには、初太郎・七太郎・万蔵・弥一郎・多吉の五人がのこった。

初太郎の家主ミグエルは、用事がありマサトラン（メキシコ西部の港町）に行くことになり、諸事を初太郎に托して船でおもむいた。初太郎は
ミグエルの妻子とともに留守を大事にしくらした。

ラ・パスの船長でアントニオ・ペロンという者がいた。ときどきサン・ホセにやってくると、ミグエルと親しくしていた。十月の初めころ、初
太郎はペロンのいる宿を訪ねると、こんなことをたずねられた。そこもとは日本に帰る意志があるかどうか。この問にたいして、初太郎は国には
老いた父母がいるので、帰国したいのは山々です。片ときも故国のことを忘れたことがありません、と答えた。それならわたしがよいように計ら
うので、まかせてほしい。わたしはマラトランへは、よく往復しているので、かの地の事情に通じている。オランダの船も来ることがあるから、
その船にたのめば帰国することは容易であろう。

そこで漂流九人があつまって相談した結果、ことばを多少おぼえた初太郎と善助が、まずペロン船長とともにマラトランに行き、そこで帰国を
謀ることにした。初太郎はミグエルの妻子に、マサトランに行きたい、というのと、何のために行くのか、と問う。町のようなすを知りたいし、ミグ
エルにも会いたい、というのと、妻子はかれの申し出をそうむげには断れなかった。

マセトランは繁華の地であったから、ミグエルの妻は初太郎のために新しい衣服をつくり、朝晩の食卓にもごちそうをならべた。十月二十八、
九日ごろ、ペロンの船が出帆する旨連らくがきた。ミグエルの妻子はすこしは様子を察したようで、これが今生の別れになるかも知れぬとおもい、

名残をおしみつつ、初太郎の手をとったり、抱きしめて別れた。ミグエルの子は馬にのり、また七人の者も二人を浜辺まで見送った。

ペロン船長の船は、四百石積みの二本マストの帆船である。乗組員は七名。船は東南の方向にむけて帆走した。天気もよく、風も強かったので、出帆して五日目にはマサトランに着いた。

マサトランは、メキシコ西部に位置し、当時は人家七百ほどの港町であった。風光明びのオラス・アルタス湾を見おろす高台にあり、三百数十キロはなれた対岸——カリフォルニアの最南端——には、サン・ルカス岬があった。街の中には赤レンガの二階三階の家が多くみられた。道路の幅はひろく、酒店ではさまざまの名酒の入ったビンがならび、また呉服屋はラシャ製の布地や毛布などをひさぎ、その他肉屋なども多かった。

ペロンと当地の間屋のあるじは、初太郎と善助をともない、金持ちの店をまわり、日本漂流を帰国させるための寄付をもとめた。すると銀貨五枚、十枚、あるいは二、三十枚、豪家（物もちの家）だと、五十枚も寄付してくれた。その数は三六〇枚にも達した。うち百枚をペロンにわたし、残りの百数十枚を帰国するまでの雑費にすることになった。

日本漂流民が金持ちの家をまわり、合力をあおいでいることを知った初太郎の家主ミグエルは、せんだってからマセトランにいたのだが、初太郎がやかいかいになっている間屋にやって来ていった。——その方帰国せずとも、行く行くはわが娘と結婚すれば、銀一万枚をつかわすつもりだ。その金を元手となし、商売するもよし、またその金があれば一生安楽にくらせるはずだ。どうか帰国を思いとどまってほしい。

初太郎はいった。

これまで受けた御高恩は、蒼海よりもふかく、いままたねんごろに引きとめられることは、まことにありがたいことですが、国に老いた父母を残してきた身であれば、帰国して孝養をつくしたいとおもいます。いま帰国するのは、ご恩にそむくことになりませんが、どうか帰らせて下さい。そばにいたペロン船長も、いろいろことを添え、帰国させてやってほしい、といったので、ミグエルもついに納得した。

当地の長官にも、便船をえて帰国したい旨をつたえたところ、四、五日後に中国へむかう商船があるとの連絡がペロンのところに届いた。初太郎と善助は、サン・ホセに残った仲間七人は、われわれよりも苦勞しているはず、どうかいっしょに連れ帰りたい、というと、ペロンは頭をふりながらいった。

サン・ホセにかれらを迎えるに行く時間はない。この地から中国へむかう船は、一年に一度か、二年に一度しかない。いまこの機会をのがすと、いつ乗船できるかわからない。ペロンは、便船があることに残り七名のうちから、二人もしくは三人づつ送り帰そう、といったので、両人はひと

まず安心した。そこで初太郎と善助が先発することになった。

両人がマサトランに逗留すること五日——天保十三年（一八四二）十一月月上旬、「アビゲイル・スミス」号（船長ドウン）に乗船した。それはアメリカの商船であった。二本マストの船長十七間（約三〇・六メートル）、乗組員九名の帆船（ベルガンティン船）であった。

船は針路を西にとって帆走した。

乗組員の多くはアメリカ人であった。かれらは英語しか話さず、会話にこまったが、一人フランス人がいて、その者がスペイン語を話したので、二人は日本のことを話題にしてはしくなつた。船は順風のとき十いくつある帆をすべて張ると、飛ぶように海のうえを走つた。

航海ちゅう、初太郎と善助は、昼夜を問わず帆綱をひっぱったり、いろいろ雑用に使われた。食物としては大豆を煮たもの、または小麦を団子にしたもの、塩ダラのようなものが出された。

帆走すること二十四、五日——十一月下旬ごろ、船はサンドウィッチ諸島のオアフ島に寄港した。

この島には四日ほど滞泊した。その印象は——住民はいやしく、衣服もそまつである。女は唇や指などにいれずみをしている。じぶんのことをアイナという。島の酋長はアメリカ人であるから、すこしは西洋風のところもある。アメリカから中国へ行くとき、この島に寄って、水を補給する。

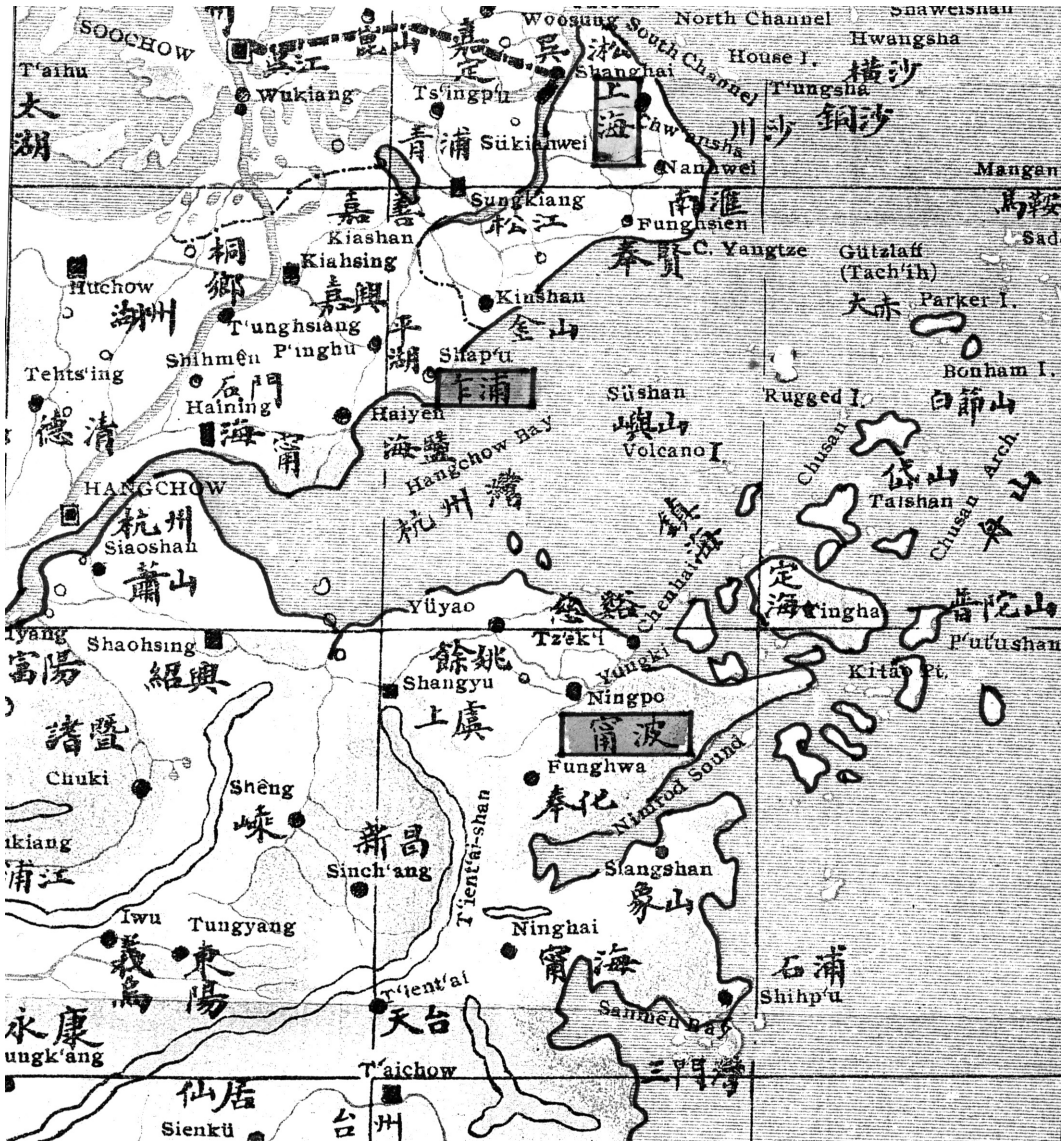
船がホノルルに寄港したとき、初太郎らははからずも土佐の国高岡郡宇佐浦の漂流民と会った。その漂流民とは——

伝蔵 重助

五右衛門 寅右衛門

である。万次郎がアメリカの捕鯨船ジョン・ハウランド号でアメリカ本土に去つたのち、四人は魚をとったり、さまざまのしごとをして命をつないでいた。

四人はどうかわれわれもそここの船に乗せてくれるよう船長にたのんでほしい。船中のしごとは何でもするつもりです、と涙ながらにたのむものだから、初太郎は船長とかけあつた。



乍浦周辺の地図

右の者は近国のものだから、いっしょに連れて帰りたい。われわれの有金のすべてを船賃とするから、どうか乗せてやってほしい、と再三懇願した。が、船長は船がせまいから乗せられぬ、ときっぱりいった。何度たのんでもだめなので、わけを四人に話すと、ひじょうに落胆し、なげき悲しんだ。ホノルルを出帆するとき、互いに泣きながら別れをつげた。

船は十二月上旬、ホノルルを出帆すると、さらに西をさして進み、マサトランを出港しておよそ七十日目にして広東の湊口・澳門（マカオ）というところに着いた。ころは正月中旬であった。到着して三日目に、船長は初太郎ひとり上陸せよ、というので、善助もいっしょにともないたい、という、だめだという。しかたがないので、銀貨を六

十枚ずつふたりに分け、善助に別れをつげた。

初太郎はボートで上陸し、少しゆくと多数の中国人が寄ってきて、いろいろ尋ねるのだが、ことは通じなかった。そこで砂の上に「日本人」と書いてみせると、相手の中国人はわかったのか、うなづき、初太郎をあるところに連れていった。

初太郎が連れてゆかれた所は、アメリカの宣教師サミュエル・ウェルズ（一八一二〜一八四四、中国名・衛三畏^{ウエイサンウエイ}、『チャイニーズ・レポジトリー』を編集。ペリー提督の通訳として来日）の住居であった。ウェルズ師は、当時日本漂流民の世話をよくしていた。

この宣教師の家は、赤いかわらをのせた大家であり、長さ二十間（三六メートル）ほどあり、奥行もおなじほどであった。一階はタイルを張り、二階は板張りであった（『亞墨新話』）。それは丘陵の坂のうえにあるベランダ付の大きな家であり、一方の側は三階建であった。部屋はぜんぶで十二室。庭にはイチジクとニワトコ（カズラ科）の樹があった。炊事場は、屋外に設けられていた。印刷所は居間の下にあった。

一八三六年（天保六年）八月当時、ウェルズの住居にいたのは、門番・買弁^{ばいべん}（外国人に雇われ売買の仲介をした中国人）・労務者・コック・印刷工と男の子四名の計九名であった。これらの者は地下室でくらしていた（Frederick Wells Williams: *The Life and Letters of Samuel Wells Williams*, LL. D. Missionary, diplomatist, sinologue, G. P. Putnam's Sons, New York and London, 1889, p. 83）。

初太郎は正月中旬より四月十日まで、九十日ほどウェルズ師の家にやかいかいになるのだが、ほかにも日本漂流民が多数世話になっていた。

惣七 加賀・能登（石川県）くまがけしほ 国鳳至郡水月村の出身。天保十二年（一八四一）十月六日、鹿島灘で遭難。翌年九月上旬、清国船にたすけられ、十一月マカオに送られてきた。

庄蔵 肥後の国（熊本県）川尻の出身。天保六年（一八三五）十一月一日天草を出帆し、肥後へむかう途中遭難。ルソン島に漂着。天保八年（一八三七）三月、スペイン船でマカオに送られてきた。

寿三郎 折から宝順丸の漂流・久吉、音吉、岩吉らも、英艦でマカオに送られてきた。

熊吉

初太郎は、右の漂流らと同居をはじめた。食事は日に三度米飯を口にし、ダイコンや魚などを所持の銀貨をだして求め、日本風に調理してもらった。頭髪も日本風にし、月代^{まかぎ}をした。

初太郎はマカオ滞在中、肥後人にいざなわれて諸所を見物した。マカオには神社らしきものは一つもなかったが、寺院はたくさんあった。芝居もやっており、見物したが、もとより何ともわけのわからぬものであった。

四月ごろになると、ここから乍浦^{ツァイプ}への便船があるということで、初太郎は能登の者——惣七、弥三兵衛——らといっしょに、四月十日ジャンクに乗ると、マカオを出帆した。マカオを出て十八、九日目に、福建省の廈門^{アモイ}（シアメン）の沖の島に寄り、それより寧波^{ニンボ}、杭州^{ハンチョウ}（上海の南西一六〇キロ）にいたり、そこから川舟に乗りかえ、七月下旬乍浦に到着した。

乍浦に上陸すると、かごに乗せられ役所にむかった。役所では紋様のついた衣服を着、笠をかぶった役人が一段と高いところの椅子にすわっており、そのそばに下吏が十名ほど立っていた。中国人の通訳をとおして、漂流の事情をひととおり尋ねられたのち、空家（間口四間ほどの二階屋）ようなところに連れてゆかれた。

その家には、左記の八名の日本漂流民がいた。

惣七（のち乍浦で病死）

弥三兵衛

甚助（石の巻）

長次郎（石浜）

喜平（気仙沼）

次郎吉（最上）

与三蔵（最上）

重吉（盛岡）

……初太郎が先にマカオにおいて別れた加賀国の漂流民。

……奥州伊達郡半田村十吉の持船「観音丸」のもと乗組員。天保十二年（一八四二）十月十九日、九十九里浜で漂流。翌十三年七月フィリピンのサマル島付近で難波。のちマニラ、香港をへて乍浦に送られてきた。

初太郎ははからずも八名の同胞と会い、いっしょに日本へ渡ることをおもうと、心づよく感じたが、別れてきたかつての仲間がいっしょだったらどんなによかったかと思った。

日本漂流民が收容されている家には、番人二名、通訳二名、飯たき一名がいた。漂流民らは毎日タバコ代として銭三文を、また三日ごとに銭湯代と

して六文づつもらった。食物は日に三度出された。朝は粥、昼と夜は米飯。おかずは大根や油あげ、とうふなどをしょう油で煮たものや、塩づけの太刀魚を大根といっしょに煮たものが出た。米の質はよくなかった。

乍浦の港町は、人も多くにぎわっており、寺院や店も多く、なかには日本の品物を売っている店もあった。町中を見物するときは、役人がいっしょだったから、自由に何でも見るわけにはいかなかった。

天保十四年（一八四三）九月八日、澳門で別れた善助と再会し、互いの無事をよろこびあった。善助は初太郎と別れてとくにかん難をなめることはなかったが、ひとりになって心細かったという。

日本漂流十名は、二派にわかれて乍浦より出帆することになった。天保十四年十一月十六日の四ツ時（午前十時）ごろ、——第一陣として、甚助・長次郎・喜平・与三蔵・重吉ら五名が、長崎通商の船「源宝」号に乗りくみ、翌十七日に出帆した。ついで第二陣として同月二十三日、弥三兵衛・初太郎・善助・次郎吉ら四名が「永泰」号に乗船し、同日長崎にむけて出帆した。十二月一日、五島列島がみえるようになると、船中では大いに祝い、よろこんだ。鶏など殺して酒肴がはじまり、日本漂流も相伴した。

十二月三日——初太郎らに乗せた「永泰」丸は、長崎に入港した。直ちに役人とともに立山御役所にまかり出ると、踏絵をさせられ、一とおりの尋問を受けたのち、揚り屋（十五、六畳じきの牢）に入れられた。翌四日、源宝号が一日おくれて入港し、ふたたびかの五名といっしょになった。本格的な取調べは、三日目から白州においてはじまり、漂流から帰国にいたるまでの経緯を微細にたずねられた。

揚り屋での待遇はわるくなく、タバコや火ばち、灯火もあたえられた。食事は、朝は汁に香のもの、昼は魚の煮つけ、夜は、茶づけなどが出た。入湯は月に三度。牢内でくらすこと百日あまり、この間に三度ほど寺院や神社にもうでた。その後、国もとから迎えの役人がくると、漂流らは散っていった。

栄寿丸の乗組員のその後。

初太郎……………弘化元年（一八四四）八月六日、長崎を出立し、同月二十日故郷の阿波の国撫養岡崎村（現・徳島県鳴門市撫養町岡崎）に帰った。のち士籍に列せられ、撫養米穀役所筆算役、岡崎御屋敷御門御番人、米穀仲買共納屋見分、小奉行などを歴任したのち、明治二十二年一月十一日、撫養岡崎において死去。享年六十七歳。

善助……………帰国後、紀州藩の士籍に列せられ、八十石の藩士となった。

七太郎……………サン・ホセで、ロレタという人の家にやっかいになった。天保十四年一月、弥一郎とともにマサトランに移り、ベニトという人に使

（初太郎の兄） われた。耳が遠かったようで、^{ハルホソノド}聾の日本人”と呼ばれた。マサトランに残ったようである。

伊之助……………天保十四年二月中旬マサトランに行き、翌弘化元年四月、多吉（太）、利三郎（儀）と三人でマニラ行のドイツ商船に乗り、マサト

ランを出帆。七月二十八日マニラに到着。ここで広東行の船にのり、中国各地をへて乍浦にいたった。弘化二年（一八四五）七月十日長崎に帰着。

利三郎……………マサトランよりマニラにおもむき、弘化元年八月十八日寧波にいたった。当地において、英国の役所（イギリス領事館？）に勤務す

る尾張の岩吉と会った。上海から音吉もやってきた。のち香港に移った。その後の消息は不明。

多吉……………伊之助とともにマサトランよりマニラにおもむき、それより中国各地をへて乍浦にいたった。弘化二年七月十三日長崎帰着。明治六年（一八七三）六月八日郷里の島原城下月町で亡くなった。享年七十四歳。

万蔵
惣助……………七太郎とともにマサトランに残ったが、その後の消息は不明である。

要蔵
三兵衛
岩兵衛
官次郎
万蔵
七太郎……………これら六名は、前に記した万蔵や惣蔵とともに助けられたスペイン船に残されたものである。スペイン船は漂流六名を乗せてグアイマス（メキシコ湾に面する港町）にいたった。このとき暴風により座礁し、その修理のどさくさに要蔵・三兵衛・岩兵衛・官次郎ら四名は脱出した。グアイマスでは、商人の家にやっかいになった。その後、三兵衛だけがマサトランにやってきた。要蔵・岩兵衛・官次郎ら三名は、その後グアイマスからワキバライン（マサトランから陸路一カ月のところ）へむかったという。その後の消息は不明。

注・河原太郎「其後の永住丸漂流者の動向」〔『初太郎漂流記』所収、徳島県教育会出版部、昭和45・10）を参照してまとめたもの。

十一 アメリカの捕鯨船、太平洋上で和船（船名未詳）を発見

一八四七年五月（弘化四年三月〜四月）——アメリカのニューベッドフォードの捕鯨船「フランセス・ヘンリエッタ」号（船長・プール）は、

北緯四二度、東経一五〇度の地点で、四人乗りの日本の難波船を発見した。その船の名は不明である。また救助者四名の氏名も明らかでない。はじめ十七名いた乗組員は、七ヵ月の漂流中につきつぎと死に、さいごに四名だけが生き残った。

漂流民らは、救助されたことをひじょうに感謝し、珍らしい品々——日本の書物、磁器、刀剣、絵、人形といっしょに捕鯨船に移った。ホノルルの住民の中には、その品の一部をもっている者もいたという。⁽²¹⁾

十二 紀州・天寿丸 てんじゅまる

嘉永三年十月（一八五〇年十一月）下旬ごろ——紀州日高郡の天寿丸（九五〇石、十三人乗）の漂流者のうち、つぎの五名がホノルルにやってきた。

寅吉（五十歳）

菊次郎 （菊松）（三十四歳）

市次郎 （市★）（三十六歳）

吉三郎 （吉松）（二十五歳）

佐蔵（十九歳）

厳冬の北太平洋上をただよう和船を発見したのは、ニューベッドフォードの捕鯨船ヘンリー・ニールランド号（船長・G・H・クラーク）であり、一八五〇年四月二十二日（嘉永三年三月十一日）のことであった。その位置は、北緯四五度、東経一五五度あたりであった。

この捕鯨船は、約六十日間太平洋上を漂流していた天寿丸の全乗組員十三名を船に収容すると、手厚くめんどうをみた。日本漂流を救助したヘンリー・ニールランド号は、カムチャッカのペトロパブロフスクに寄港したとき、乗組員のうち六名をロシア官憲に引きわたし、日本へ送還してくれるよう依頼した。また二人はアメリカカ船ニムロッド号に、さらにもう二人をマリノゴ号に引きとってもらった。そして残り五名をホノルルに上

陸せしめた（計算上、十三名ではなく、十五名になるが……）。

天寿丸が遭難するまでのいきさつは、つぎのようであった。

同船は嘉永二年（一八四九）十月——紀州有田郡（紀伊水道にのぞみ、有田川河口北岸——ミカンの集散地）でミカンを積入ると出帆した。

十月十二日……………浦賀着。

十月二十三日……………江戸出帆。豆州下田着。

江戸から帰帆するとき、米三〇〇石、ほしイワシ、藍（青色の染料）などを積んでいた。

十月二十四日……………子浦（伊豆半島南西岸）に入港。

天寿丸は、ここで数日滞船し、その間に用事をはたした。

嘉永三年正月六日……………子浦を出帆。

洋上を航行ちゅう、正月九日にわか逆風と大浪に遭い、そのうちかじを砕かれ、沈没寸前の状況となった。そのため積荷をすて、帆柱を切りすて、帆をすて、ひたすら神仏の加護をもとめた。

船は五日五夜のあいだ、風浪に翻ろうされた。やがて八丈島（伊豆諸島南部）まで一里ほどのところまで来たが、かじもろもないので近づくことができず、物をおかかて救助を乞うたが、なすところを知らなかった。やがて八丈島もみえなくなった。船はずざましいほどの大浪風に吹き流されたままであった。

数日のあいだ、北東の方向に流された。二月末になると、米と飲み水がつかた。ほしイワシを食糧とするようになった。水を絶つこと一昼一夜

におよぶことがあった。その後、ときどき雨水によって、のどの乾きをいやした。

船はただびょうびょうたる海上をただようだけであり、どこの海とも、どの方角にむかっているのかもわからなかったが、嘉永三年三月十三日ついに異国の船に助けられた（「紀州船米国漂流記」）。

天寿丸の漂流民が、ヘンリー・ニールランド号に救助されたとき、いちばん肝をつぶしたのは、黒人が

「黒牛」

のような顔を船のへりより、ぬっと差しだしたときである。

また何国の船とも知らず、捕鯨船に乗り移り、船中に数十匹つないであるブタを漂流民の眼のまえて刺し殺し、それを食べている様子を目撃したとき、一瞬おそろしさのあまり戦慄が走ったことである。

乗船して二、三日、漂流民はじゅうぶんな食物をあたえられず、空ナベや空の食器などたいてい食事をもとめた。四日目になると、ようやく腹いっぱい食べさせてくれた。また漂流民たちは、船中に米があることを知り、船長にこれを焚いて食べさせてくれるよう手まねでたのむと、船長はこれを食べると足が腫れ、日本へ帰ることができない。やはり肉食して、無事に故国に帰るよういった。

船中に出された食事は、肉食が中心であり、塩漬けの牛肉を水で洗い、それを蒸したり、油であげたりして食べた。燃料はクジラの油であり、食用油としてブタのラードを用いた。パンは緑茶にひたして食べたが、茶は焙してなかったから、青くさかった。

航海士役の菊次郎は、航海日誌のかわりとなるメモをとっていたようである。のちにホルルで万次郎に語ったところによると、遭難して十六日目に飲料水が底をついたという。米も二十六日目に食いつくし、残るはほしイワシだけになった。飲み水は、ときどき降る雨をためておいていたという（「日本人との一時間」『フレンド』紙——一八五〇・一一・一日付）。

漂流民の一行がホルルに上陸したとき、海辺に住む壮年（はたらき盛り）の異人（寅右衛門）がひとり、漂流民をみつけ、そこもとは日本人ならずや、と声をかけた。いかにもわれらは日本人である、との答えが返ってきた。

そこもとは日本のことばをよく話されるが、いかなる人かとたずねると、土佐の国高岡郡の者で、十二年以前に当地にやって来て、まだ帰国できないうでいると語った。

この里には、まだ他にもおなじ国のもの（万次郎とその仲間）がいる、というので、すぐ壮年の男について行ってみると、ひざを折らねば中に

入れないほどの小屋であったので、表の芝のうえにごさを敷いてすわり、話を聞くことにした。ここに来たからには、もはや日本へ帰ることはむずかしく、その方便を知らない。われわれは無筆なれば、ふつうの人間のように扱われず、まただれも取りたててくれる者もなく、くやしきといつたらない。

ここはずいぶんよい土地である。年中じゅばん（着物の下に着る肌着）一枚あればよく、他の衣服はいらない。食物も日本のものと比べても遜色がない。

漂流民の寅吉（吉松か？）は、のちにハワイの地理・風俗・習慣・産物などをくわしく口書くちがきにおいて語っているが、とくに男女間の風俗に関するものに、おもしろいものもある。

——男は全身に入れ墨し、陽物ようぶつ（性器）をあらわしている者もいる。女はすすきの葉のようなもので前陰をおおいかくし、尻のほうは丸はだけである。アメリカ人は大船にこういった女を引き入れると、めいめい奸いんする。

五人の漂流民は、ホノルルに滞留ちゅう、万次郎に誘われ、ときどき遊女屋に足をはこんだが、ぎぬぎぬの別れ（男女が共寝した翌朝の別れ）に際しての島女のことばは、いっこうにわからなかった（「紀州船米国漂流記」）。

天寿丸の漂流民五人は、嘉永三年十月十一日（一八五〇・一一・一四）ごろ、中国へむかうアメリカ船（船名はコツヘシ）をえることができたので、荷物をまとめてこれに乗り移った。別れにさいして万次郎らに留邦人と、離別わかかれの情をのべあった。

このアメリカ船は、嘉永四年（一八五二）二月上旬——香港に到着した。それより上海にいたり、当地で下船した。ついで七月八日日本への通船がある乍浦ツナシにむけて、中国側の官憲とともに川船に乗り出発し、乍浦には同月十三日到着した。

乍浦に着くと、五島ごとう（長崎県西部の島しょう群）の漂流民六人がおり、ここにて日本漂流人はつこう十一名となった。嘉永四年八月（中国の道光三十一年閏十一月十一日）十一名の漂流民は、長崎にむかう便船をえて乍浦を出帆し、十九日目の十一月二十八日（中国暦）長崎に到着した。

長崎は邦暦の十二月二十九日にあたり、各家には門松が建てられ、正月の準備をしていた。一行十一名は立山役所へ連れて行かれ、そこで踏絵をさせられたのち、酒飯をたまわり、即日御法どおり入牢した。

一同は翌嘉永五年（一八五二）四月二十八日まで揚屋に入れられ、同年六月牢を出ると、それぞれ無事故郷に帰った。天寿丸の漂流民五人の故郷では、溺死したと思った者がはからずも帰ってきたので、親族らは大いにおどろき、かつ大歎びしたということである。

注

- (1) 『ハワイ日本人移民史』（布哇日本人移民史刊行委員会、昭和二十九年四月）、三頁。
- (2) 山下草園著『日本布哇交流史』^(ハワイ)（大東出版社、昭和十八年一月）、四頁。
- (3) 注（1）の三三頁。
- (4) 注（2）におなじ。
- (5) 山下草園著『布哇諸島』（東京講演会出版部、昭和十七年五月）、七三頁。
- (6) クルーゼンシュテルン『日本紀行 上巻』（駿南社、昭和六年八月）、八九頁。
訳註者 羽仁五郎
- (7) 『環海異聞』叢文社、昭和五十一年六月）、一六六頁。
- (8) Shunzo Sakamaki: *Japan and the United States, 1790-1853*, The Transactions of The Asiatic Society of Japan, second series, vol. XVII 1939, p. 76
- (9) *Comprehensive Geography of the Chinese Empire and Dependencies* 中国坤輿詳誌 T' Usewei Press, 1908, p. 209
- (10) J.N.Reynolds: *Voyage of the United States Frigate Patonac under the command of Commodore John Downs, during the circumnavigation of the globe, in the years 1831, 1832, 1833, and 1834*; Harper & Brothers, New York, 1835, p. 364
- (11) 注（9）の二〇九頁。
- (12) James B. Connolly: *Master Mariner the life and voyages of Amasa Delano* Chap. XXI, 1943.
- (13) 同右。
- (14) 注（8）の七三頁。
- (15) キャサリン・ブラマー著『最初にアメリカを見た日本人』（日本放送出版協会、昭和三十九年十月）、一一八頁。
酒井正子訳
- (16) 注（1）の三六頁。
- (17) W. D. Alexander: *A Brief History of the Hawaiian People*, American Book Company, New York, Cincinnati, Chicago, 1891, p. 21
- (18) 同右。
- (19) 注（1）の三六頁。
- (20) 室賀信夫 矢守一彦共訳『蕃談』（平凡社、昭和四十年三月）、一九頁。
- (21) 注（8）の七五頁。